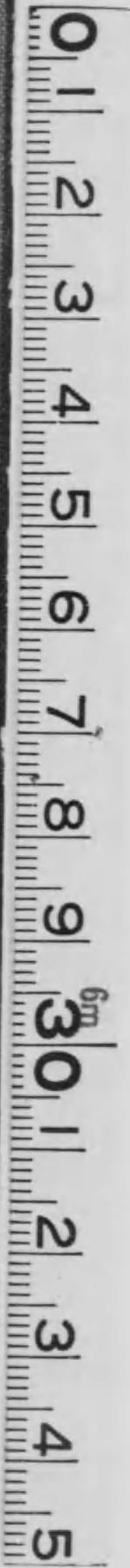




276
321



始

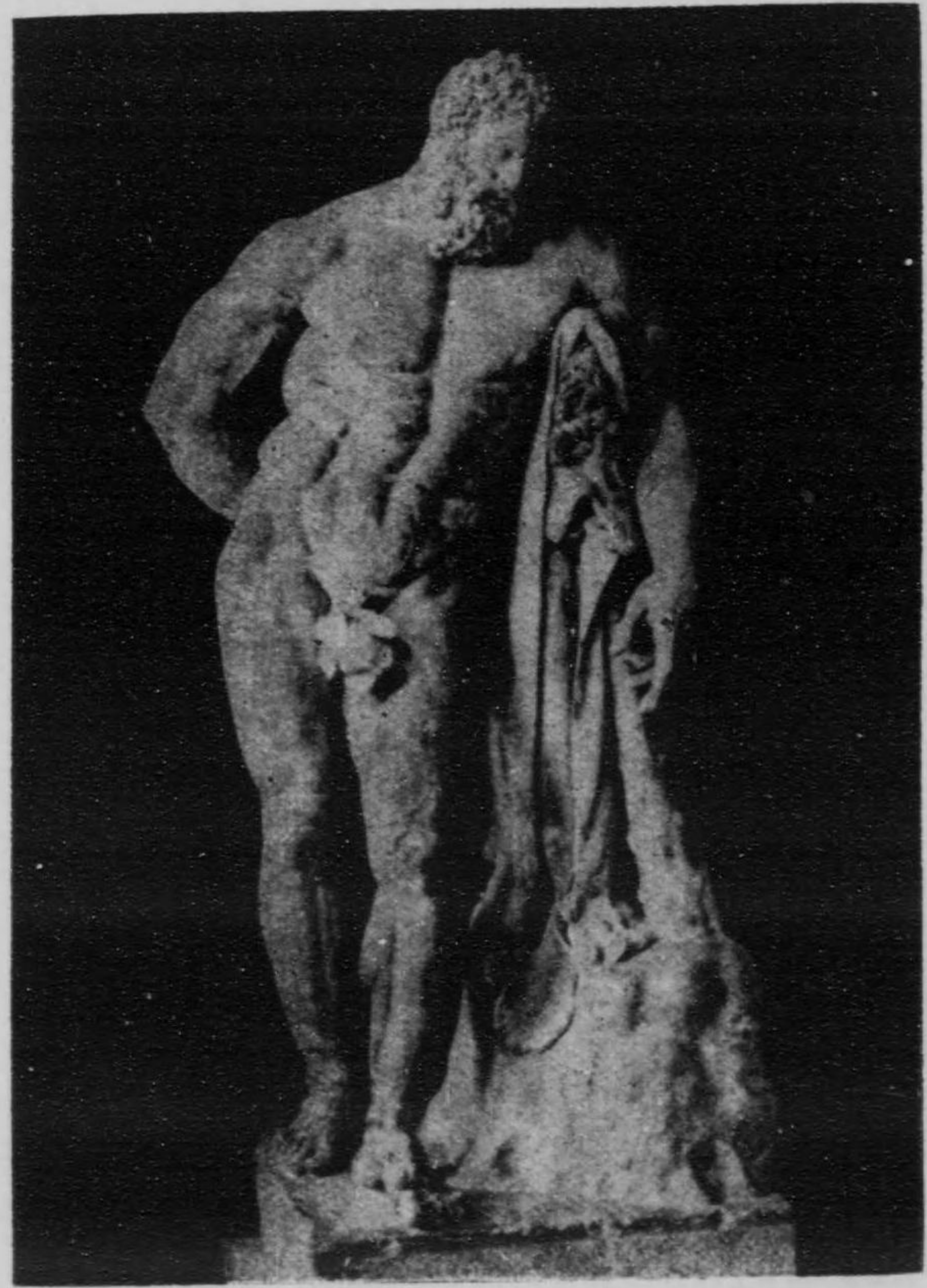




角 力 (伊國フロレンス、ウフィチ美術館)



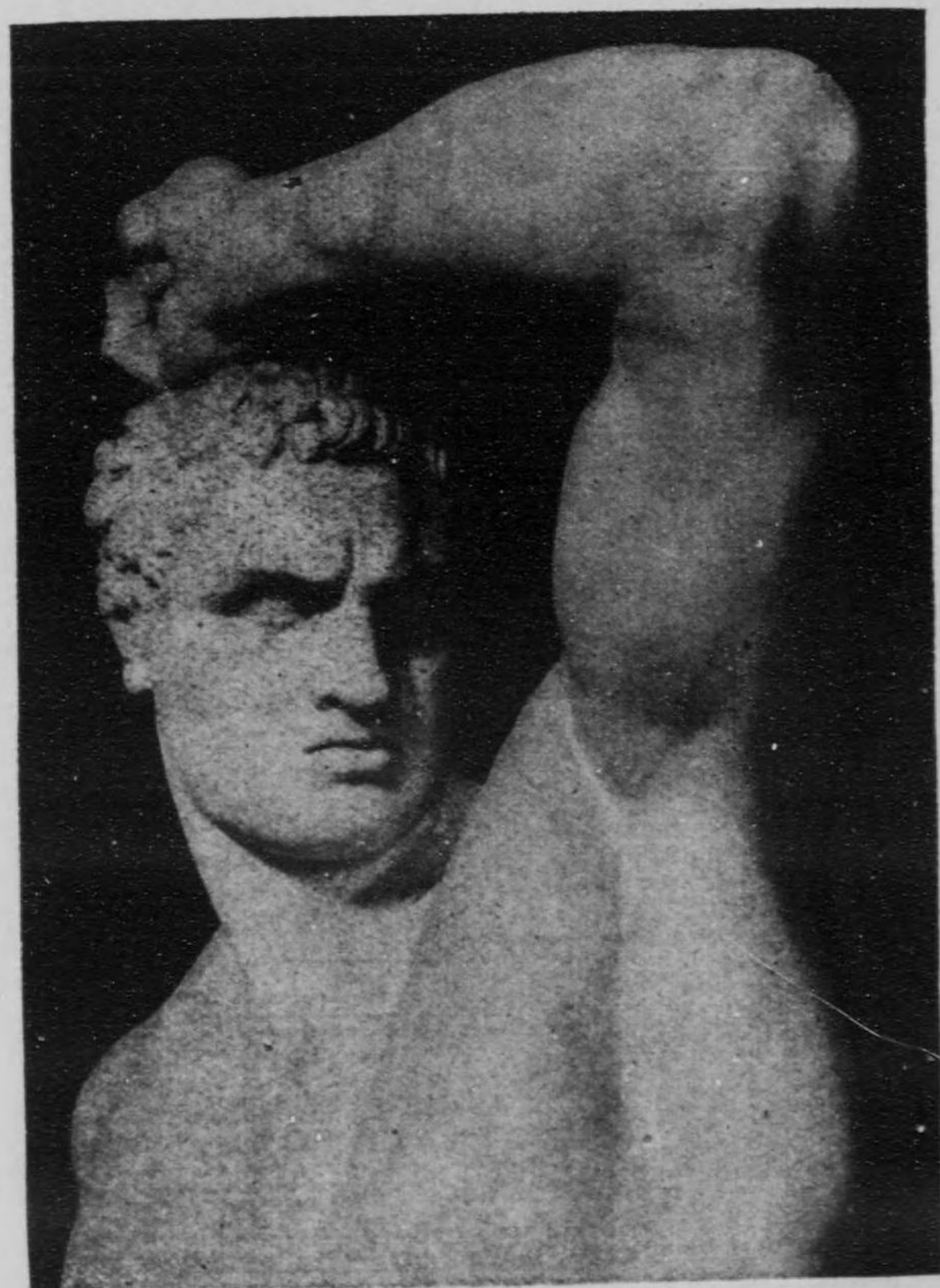
圓盤投手（ローマ・マッシミ殿）



ハーキュリーズ (伊國ネーブルス博物館)

瀕死の剣士 (ローマ・カピトル博物館)





カ 士 (伊國カノーバ作、ローマ、ヴチカン博物館)

序

近來我が國に於て運動競技の勃興して來たことは、甚だ喜ぶべきことである。以前は運動といへば、軍人か學生の專有の如く思はれて居たが、近頃は民衆がこれに興味をもち、地方の青年などもこれを行ふやうになつて、漸次國民的となりつゝあるのは結構なことである。又元はファンといへば、相撲に限つたが、今日は野球のファンなどが、學生以外にも出來て、力を入れるやうになつたのは面白いことである。運動競技は青年に限らず、老年でも相當にやれるものもあるし、又これを見る事がどれだけ養生になるか分らない。そこには情實も、門閥も、財力も、政黨もない、裸一貫の鍛へ上げた身體と、燃ゆる意氣とがぶつかり合つて、火花を散らす正味の争ひがあるのみである。何といふ氣持のいゝ心行く

光景であらう。一度びその趣味を覚え出した者には、到底これを廢めることは出来ないのである。

運動競技は以前から傳統的に盛んな國もあり、又その種類、趣味も、國民に由つて様々であつて、それが最もよく國民性を代表するものである。それで自己の經驗、西洋に在つて見聞した事、その他の材料を總合して、歐米の主もな國に於ける運動競技の由來、現況、並にその國民性との關係を見ようと試みたのが、本書である。各種の運動競技の方法に關する書物は随分あるが、この書の如き試みは、歐米にも余りないやうに思ふ。

今や大阪では極東オリンピック、ゲームスが催されて、日、支、比三國の健兒が龍攘虎搏の目覺ましき奮闘を爲さんとして居る。これが東洋諸國民の親善に資すると共に、我が體育界に與ふるの影響は至大であら

う。同時にこの小著が、運動競技に對する國民の自覺を喚起するの一助ともならば、至幸である。

大正十二年五月

極東オリンピックを観るべく
大阪に出發せんとする前夜

東京にて 著 者 誌

目次

第一章	古代ギリシヤの國民性ニ運動競技	一
第一節	古代ギリシヤ人の美の鑑賞	一
第二節	精神の美と身體の美	四
第三節	ギリシヤ人の美的生活と競技	七
第四節	オリンピックク、ゲームス	九
第五節	オリンピックアの祭典の意義	二二
第六節	オリンピックク、ゲームスの實況	二三
第七節	オリンピックク、ゲームスの五日	二六
第八節	光榮に耀く勝利者	二八
第九節	オリンピックク、ゲームスの最後	三〇

第十節	オリムピック、ゲームスのギリシヤ人ニ及ぼる影響	三二
第十一節	スバルタ人の教育	三三
第十二節	アテネ人の教育	三五

第二章 ローマの國民性と運動競技

第一節	運動競技に對するローマ人の態度	三三
第二節	コロッセオのことごと	三六
第三節	動物の演技格闘	四〇
第四節	人間と猛獸の格闘	四四
第五節	人間同士の格闘	四五
第六節	格闘の廢止	四八
第七節	中世より現代まで	五一

第三章 英國に於ける運動競技と國民性

第一節	英國人の田園生活	五七
第二節	英國人の體格及び性質	六二
第三節	狩獵	六四
第四節	英人と動物	六七
第五節	競馬	六九
第六節	運動及び競技	七二
第七節	運動競技は紳士の資格	七九
第八節	スポーツ	八三
第九節	運動場	八七
第十節	クリケット	九三

第十一節 佛國人のクリケット評……………九六
 第十二節 クリケットボール……………一〇六
 第十三節 ゴルフ……………一一三
 第十四節 ローンテニス……………一二四
 第十五節 ボートレース……………一二八
 第十六節 漕艇の練習……………一三三
 第十七節 本選手の練習とレース……………一三六
 第十八節 游泳……………一四一
 第十九節 世界の觀光……………一四五
 第二十節 陸上運動……………一五三
 第二十一節 名士と運動……………一六二
 第二十二節 勇氣……………一七四

第四章 フランスの國民性と運動競技……………一四九
 第一節 フランス人の氣質……………一五九
 第二節 フラスス人の教育と運動に對する態度……………一五三
 第三節 フランスの運動競技……………一五七
 第五章 ドイツの國民性と運動競技……………一六一
 第一節 ドイツ人の氣質……………一六一
 第二節 ドイツ人と體操……………一六三
 第三節 ドイツの學生生活……………一六六
 第四節 メンズール……………一七一
 第六章 米國國民性と運動競技……………一八一
 第一節 米人氣質……………一八一

第七章

我が國民性と運動競技

第二節 米國に於ける運動競技の由來……………一八四

第三節 運動競技の現況……………一八八

第四節 運動競技の練習……………一九六

第五節 運動競技に伴ふ利弊……………一九九

第一節 我が國民性と國技……………二〇九

第二節 今日行はるゝ運動競技……………二一五

第三節 運動競技と學校……………二一九

第四節 運動競技と國家……………二二一

第五節 運動競技と世界……………二二九

第六節 運動競技の現在及び將來……………二三四

終

挿畫目次

決勝點へ (佛國ブーシェー作)……………扉裏

角力 (古代ギリシヤ彫刻)……………卷頭

圓盤投手 (古代ギリシヤ彫刻)……………卷頭

ハーキュリーズ (古代ギリシヤ彫刻)……………卷頭

瀕死の劍士 (古代ギリシヤ彫刻)……………卷頭

力士 (カノーバ作)……………卷頭

パンクラチアム (ギリシヤ古瓶模様畫)……………一五

ギリシヤ青年の跳躍練習 (同上)……………二六

青年の投槍 (同上)……………二七

ギムナジアムの内部 (同上)……………二六

ローマのコロッセオ	四三
コロッセオに於ける基督教徒の最後	四三
闘ふ剣士 (古代ギリシヤ彫刻)	四六
英國ダービーの競馬	七一
英國大學對抗クリケット	九一
オクスフォード對ケンブリッジ大學ボートレース	九二
同上 ホツケイ	二七
ケンブリッジに於けるボロ	二七
ドイツ體育家ヤーンとドイツ體操組合徽章	一五
ドイツ大學生のメンズール	一七
同上 負傷學生の手當	一七
ボヘミア、ブラーグ市に於けるチエク人の大體操會	一七

米國エール大學に於けるフットボール	一九
フットボールに於けるタッチダウン	一九

— 終 —

運動競技と國民性

文學博士 下田次郎著

第一章 古代ギリシヤの國民性と運動競技

第一節 古代ギリシヤ人の美の鑑賞



古代に於いて運動競技の盛んであつたのは、ギリシヤ即ち古のヘラス Hellas である。ギリシヤでは美といふことに大なる價値を置き、美しい立派な身體を作り上げる事は、その人民の努力の一つであつた。ギリシ

ヤでは美術が非常に發達し、特に建築と彫刻に於て、後世の模範となるものを多く遺した。彫刻は主として人體のそれであつて、二千餘年後の今日に於ても、到底それ以上の彫刻は出来ない程のものがある。而してその彫刻はいふまでもなく、當時のギリシヤ人をモデルとして作つたものであつたとすれば、如何にギリシヤ人の身體が完全に發達して居たかが窺はれる。しかしモデルのみならず、一般の人民の身體もまた立派であつたのである。

古代のギリシヤに於て、人民の身體が、如何にして此の如き完全と美に達したかといふに、それには根深き由來があるのである。

古代のギリシヤ人は、美といふものに、大なる價値を置き、その美を發現し、鑑賞することを、努力の目標とした。美には身體的美と精神的の美がある。しかしその兩者は別々のものでなくて、相互に密なる關

係がある。アテネの教育に於ける學科はミュージック music と、ジムナスチック gymnastic であつた。ミュージックは、詩音樂等の美の女神なるミューズ Muses に關する學科といふ義で、文藝、音樂、美術の教養を與ふるものであり、ジムナスチックは體育である。プラトールも、身體にはジムナスチック、精神にはミュージックと、二學科の目的を述べ、同時に、兩科の教師は精神の發達を主眼とせねばならぬと言つて居る。「唯の力技者^{アスレト}は野蠻人の要素を有ち過ぎるやうになり、唯の文藝家は柔弱過ぎるものになる。この兩者を最も適當なる割合に併有せる者こそ、眞のミュージシアンであり、ハーモニスト（心身の調和のとれた者）である」とのプラトールの意見は、當時（西洋紀元前五―四世紀）のアテネの人民の一般の思想であつた。

第二節 精神の美と身體の美

それで身體の美も固より美として鑑賞し、嘆美するに十分であるが、更に身體の美に由つて、精神の美も得られるとしたから、一層身體の美の價値は深大となつたのである。又身體の美なる人は、心も美であつて、惡を行ふことなしとも考へられて居た。それで、犯罪の嫌疑で、法廷に引出された者の辯護に、斯る立派な身體を有せる者は、罪を犯す氣遣ひはないとの主張で、無罪となつたといふ例もある。それほどギリシヤでは、美なる身體に大なる意義を置いたのである。加ふるに、強大なる隣接せる敵國マセドニア、ペルシヤに對する防備の爲にも身體を鍛へ、武を鍊るの必要はあつたのである。それで各の市には、體育場や練武場があつて、成人も兒童も、そこで着物を脱ぎ、角力、拳闘、跳躍等の練習

を行つた。而して唯勝つ事のみを目的とせずして、其の技の優美及びスタイルに重きをおいた。ギリシヤの文士ルシアンの著「アナカルシス」Lucian's Anacharsis に、ソロンがスシシアのアナカルシスに、ギリシヤの教育の理論及び實際を説いた事が出て居るが、それに依つて、ギリシヤ人の體育の有様がよく窺はれる。ソロン曰く、「さてギリシヤの青年の身體については、先づ彼等を屋外の空氣に慣れしめ、あらゆる天氣に堪へ得るやう、裸體になし、又これに油を塗る。かくて不斷の身體の鍛鍊を爲したるものは、最良の兵士となるを信ずる。吾等の青年は強壯であり、皮膚は燧く太陽より色を取つて、薔薇色であり、身體は適當なる相稱と比例を具へ、熱と活氣と勇氣に充ちて居る。斯くて吾等は吾等の青年をアテネの守護者、公共の安寧の維持者、自由の防護者と成すの希望を以て、體育を行ひつゝある」と。それでギリシヤ人は身體を唯それ自身美

なるものとして評價する外に、又活動及び姿態に於てその美を觀たのである。又スバルタの王レオニダス（紀元前五世紀）が、ベルシャ王ザークセスの雲霞の如き大軍を、三百のスバルタ人と五千の友軍とを以て防戦したのも、國民の體育と鍊武の效果の發現である。スバルタ王アゲシラウス（紀元前四世紀）は、小アジアで、ベルシャ人と戦ひ、その目ほしい者を捕虜として連れ歸り、裸體にして行列せしめ、その前を歩いてスバルタの軍隊に見せた。スバルタの日に焦けた、神經の強い、運動競技で鍛へた身體と、色の白い、女のやうな、ブク／＼したベルシャ人の身體との對照に、換言すれば、ギリシャ人とパーリアンスとの相違に注意せしめ、一層國家的自尊心を強めたと云ふ。それは今日に於ても大いに意義のある事で、我々にも其ベルシャ人に對するスバルタ人の如き一種の自尊心を、發達せる身體に於てもちたいと思ふ。それは一すら

運動競技の普及と隆盛に待つ外はないのである。

第三節 ギリシャ人の美的生活と競技

かやうな次第で、ギリシャ人は、立派な身體を鍛へ上げる事に、非常に努めた。ギリシャ人は、戦争で捕虜とした者等を奴隸として使役したから、自由民は生活上の顧慮なしに、専ら美的生活を營むことが出来たのである。美的生活とは美なるものの生産と鑑賞に外ならぬ。元來學校 School なる語は、ギリシャ語の *skhole* 即ち閑暇 *leisure* といふ語から來たものである。即ち學校は自由民が有する閑暇を、如何に過ごすかの方法を學習する所であつて、ミュージックとジムナスチックは、言はばその閑潰しの爲の手段に外ならぬ。それでギリシャの自由民は、生活難なしに、美的生活を營むことを得たのである。

立派な美しい身體を鍛へ上げれば、自らそれを比較し、競争して、肉體、力の美を十分に展觀せしめたいのは、人情である。又ギリシヤ人程光榮といふものを欲した國民はない。所謂ジムナスチックもなく、これを行ふ場所もなかつたホーマーの時代に於てすら、競技はあつたのである。ギリシヤ人の競技は起原をイオニアに發したもらしく、ホーマーは殆んど紀元前一千年のパトロクルスの葬儀の際に於けるアキレスの競技の事を「イリアド」に記して居る。ホーマーの詩篇中には、ネスター Nestor が自己の競技の追想を述べた句がある。

拳闘では、エノプス Enops の子なるクリトメデス Chytomedes から賞與を奪つた。

角力では我に對抗したブレウロニア人 Peuronian なるアンカエアス Anchaeus を負かした。

競走では、矢の如きイフィクラス Iphiclus を追ひ越した。

また投槍では、フィレアス Phyleus やポリドール Polydore を抜いた。

唯戦車の競走では、アクター Actor の子等が多数の力で我を敗つた。

斯る競技は、古代のギリシヤでは、或る重大な儀式の催される時には、行はれて、儀式に威嚴を加へたのである。トロイの戦争を去ること遠からざる頃に、かゝる競技はギリシヤの主なる都市で、一定の時期を置いて、行はれた。その競技は、神話적起原を有し、各これを主寄する神があるので、宗教的性質をもつて居た。デルファイ Delphi, イスミア Isthmia, ネミア Nemea のゲームスの如きこれである。

第四節 オリンピック、ゲームス

しかしかゝるゲームスの中で、最も有名なものは、いふまでもなく、

オリンピック、ゲームスであつた。このゲームスは、ギリシャの年代計算の基準とされるほゞ、重大なものであつた。このゲームスは四年毎に行はれたので、この期間をオリンピックiad Olympiad といつた。最初のオリンピックiad は紀元前七七六年に始まる四年間であつて、この時から、その勝利者の姓名が、公簿に記録せられる事となつた。即ち七七六年にコロボス Koroebos といふ人が競走で勝つたといふ。これがオリンピック、ゲームスの最初のレコードである。歴史家もゲームスの出来事を記載し、勝利者の事を述べて居るのを見れば、今日我々が考へるよりは、遙かに重大視したものと見える。例へば史家スーシデス Thucydides (紀元前五世紀) は、ペロポネサス戦争中の或る重要な事件は、ローデス島のドリエアスが二度勝利を得た時のオリンピックiad の期間に起つたと記して居る。このゲームスは、アテネとか、スパルタとかといふ一都市に關するもの

でなく、ギリシャ民族全體の與るものであつたから、この出来事は全ギリシャ的重要さを有し、ギリシャの人民の生活の一つの中心を形成して居たのである。昔のギリシャ人はその民族の居住する所が、世界全體と考へて居たから、このゲームスは正に世界的事件であつた。而してギリシャ民族は、今日のギリシャ半島と、地中海沿岸に植民して、到る所に都市國家を造つた。ギリシャ半島も山や谷で限られて、地方的特色を有し、従つて部族間にも疎隔争闘を起した事もあり、又植民地は一層遠隔の所であるから、抗争する事もあつたが、共に皆ギリシャ民族であるといふ自覺は持つて居たのである。而してこの自覺を強め、市や部族や植民地の一致、平和を誘致したものは、オリンピック、ゲームスである。即ちこのゲームスは、一種の世界平和祭ともいふべきものであつた。それでこのゲームスのある月はエケケイリア ekecheiria 即ち神聖なる休戦が

行はれ、もし戦争があつても中止せねばならなかつた。又このゲームスが實際對立せる市や部族の心を和け、争鬭を防止した事も少くない。このゲームスの行はれるギリシヤの中部西海岸に沿へるエリスの地方は、この間は特に神聖な地とされて居た。又海陸から來集するものの道中も自由安全であつた。

第五節 オリンピアの祭典の意義

さてこのゲームスの行はれたのは、エリス Elis にあるオリンピア Olympia である。此所には杜があつて、ギリシヤの大神ジウス Zeus を齋き祭れる壯麗なる殿堂を始め、大小神祇の祠や拜壇や、數多の諸神や勇者の立像があつた。又體育場や練武場も周圍にあつた。ゲームスを行つたスタヂオン Stadion は、ジウスの神殿の東北、クロノスの丘の麓にあつた。

ゲームスのある時には、諸方から人民が參集するのは勿論、詩人や、音楽家や、雄辯家や、彫刻家なども來つて、その日頃練り上げた才藝を披露した。歴史家の父といはるるヘロドタスもこゝに來つて、その歴史の一部を朗讀したといふ。又市が立つて、各地方の産物を持寄つて交換しまた互にその地方の富裕と華美とを競つたから、文化の進歩、傳播の上にも、多大の衝動と利益を與へたのである。

この競技の行はれた祭典は、夏至の後第一の満月の日から始まつて、五日間續くのである。尤も紀元前七二八年までは短距離競走だけで、祭典も一日で済んだのであるが、後には角力、拳闘、跳躍、槍投げ、圓盤投げ、長距離競走、戦車競走等が加はつて、五日になつたのである。

第六節 オリンピック、ゲームスの實況

さて祭典の行はるゝ日には、ギリシヤ全土の人民が、オリンピアに集集して、ジウスの大神に宗教的敬虔の誠を捧げ、又その天下晴れての競技を觀、故郷なる州、市、植民地から選出された代表的選手の功名手柄を祈つて、參集者の心血を湧かしめた。この勝利こそは各地の郷國の最大の誇りであつたからである。特に祭典の主神たるジウスは、ヘラスの他の神々の如く、人間の身體の美、力、敏捷、熟練を喜ぶ神とせられ、オリンピック、ゲームスはその名譽の爲に行はれる競技であつたから、その意氣込も非常なものであつた。

競技の種目の主なるものは、競走、跳躍、槍投げ、圓盤投げ、拳闘、角力、競馬、戰車競走、武裝競走である。この他パンクラチアム *Panctium* といふ角力と拳闘の合したやうな猛烈な競技や、五種競技 *Pentathlon* (跳躍、投槍、投盤、競走、角力) もあつた。



ムアチラクンバ
(畫様模瓶古アシリヤ)

競技に與り得る者の選擇は、エリスの國人が自國人から選舉した審判者(これをヘラノヂケ *Helladicæ* といふ)に由つて爲された。その人数は時によつて違つたが、後には八人といふ事になつた。競技に與り得る者は、最初の頃は、ペロポネサス人に限つたやうであるが、漸次遠隔の地にあるギリシヤ人も加はることとなつた。そこで競技申込者は、兩親がヘラス血統の者であること、本人は政治上道德上何等の汚點なき者なること、十ヶ月競技の練習をした事の證明を、審判者にしなければならなかつ

た。これに依つて審判者は、候補者を選び、ジウスの拜壇の前に、軽忽と不正の所業なき事の誓を立てしめ、それからなほ大會前三十日間その技を練習さして、堪能と認められた者が、競技に出場できたのである。競技に出づる者はかやうに神に誓を立て、神の照覧の下に技を争ふのであるから、その敬虔、緊張の有様も推測せられる。

第七節 オリンピック、ゲームスの五日

第一日はオリンピックの大神ジウスに豚の犠牲を供へる。そして選手、競技指南役、審判者などの宣誓式が神前で行はれる。この日は、この祭典に諸方からギリシヤ人が参集して、久瀾を叙したり、前回のゲームスの話をしたり、今度の相手の長所短所を聞いたり注意を受けたりして、競技者は親戚や友達に取捲かれて、明日の用意をする。

第二日目には、東の空に日がさし出づるを合圖に競技が始まる。観衆は夜明前からひし／＼と會場に詰めかける。此日は少年と青年の競技である。父や兄は我が家の花の若武者の功名如何にと、審判者に率いられて、競技場に入るのを見送る。女人と奴隸は觀覽禁制であつて、女人は場の南方を流るゝアルフェイオスの川を北に渡ることを許されなかつた。しかし中には、愛兒の勝負如何にと氣遣ひ、男裝して場に入り、兒が拳闘に勝利を獲たのを見るや、嬉しさの餘り駈けつけて、我が兒を抱いたので、女といふ事が發覺して、即座に死刑の宣告を受けたが、その健けな心に感じて、辛ふじて赦された母親もあつた。

第三日、四日目はいよく、大人の競技で、本人は勿論、見物人も郷國の榮辱この一舉にありといふ意氣込みであるから、眞に骨鳴り肉躍るゝ感があつた。

第八節 光榮に耀く勝利者

第五日目はオリンピック、ゲームスの勝利者に勝利の表彰式がある日である。そのトロフィーは、オリンピアの神域の杜に自然に茂れる橄欖樹の枝を、両親の存命する男の兒が、黄金の小刀を以て伐つたので、作られた冠であつた。この冠はジウスの神殿に於て、その壯嚴なる玉座の許、美しき机の上に見えるやうに置かれ、オリンピオニケス Olympionikes 即ち勝利者は、審判者から、先づ毛製のバントで頭を捲いて、その上にこれを冠らされる。橄欖の冠の外、棕櫚が渡される。冠が戴かされると、勝利者の名は、父の名と其郷國の名と共に、傳達者に由つて觸れ廻はられる。勝利者は最もよく神に仕へた者であり、神の恩寵を最も厚く蒙善た者であり、又國家に最もよく盡し得る勇者であり、而して美にしてつ

なる男子の典型であつた。それで勝利者の像はオリンピアの神聖の杜に立てられ、名譽の饗宴は張られ、雄辯を以てこれを頌し、詩人はその詩を以て勝利を歌つた。この中にはシモニデスやピンダールの如き一流の詩人もあり、ピンダールの如き、その名譽を永久に傳へて居る。本國に歸るといふと、凱旋のマーチがあつて、凱旋式が擧げられる。市の周壁の一部をわざ／＼毀して、凱旋門が建てられた事もある。アテネでは外國の使節や名譽の賓客を迎ふる公會堂 Pnyxion で、饗宴を催され、スバルタでは、戦争の時、王の側近で戦ふことを許された。故郷に像の立つた事はいふまでもない。實に勝利者一生の面目、家門の光榮これに過ぐる者なく、男子生れてオリンピックの勝利者たらば、以て瞑するに足るのであつた。ルシアンに據れば、勝利者は、ギリシヤ人の最も名譽ある人であり、又同じ階級の者の中で最もノーブルな人と考へられた。ヘロドタ

スも、カリアス Callias がオリンピツクの競技に於て、競馬で一着であり四馬競走で二着であつた功名と、その祖國の自由を恢復した功績とを同列に置いて、彼れは屢々何人の口にも上るべき者であると賞讃して居るのを見ると、ヘラスでは競技に於ける手柄は、最大なる政治的奉仕と同格に、高く評價された事が知られるのである。

オリンピツクの競技の勝利者が、如何に英姿颯爽たる勇者の相貌骨格を有し、如何に立派なる身體の所有者であつたかは、今日残存せるギリシヤの大理石の彫像に由つても窺はれる。例へばローマのマツシミ殿にある圓盤投手、フロレーレンスのウフイチ博物館にある角力像の如きこれである。(巻首挿繪參看)

第九節 オリンピツク、ゲームスの最後

オリンピツク、ゲームスの最初のレコードは紀元前七七六年である。即ちこれが最初のオリンピアドの最初の年である。而してその最も健全で全盛な時代は、紀元前六乃至五世紀からペロポネサスの戦争(紀元前四三—四〇四)までであつた。後には競技を職業とするものが出来て、漸次墮落した。しかしそれはギリシヤがローマに征服されてから、すつと後の事である。ローマの皇帝ネロの如きも、この競技の名譽の冠を獲ようとした。それで後にはギリシヤ人に限らず、誰でも競技に参加し得るやうになり、遂に本職のものばかりが競技を行ふ興行物の如くなつてしまつた。そしてさすがギリシヤの自由と偉大の數世紀に亘つて、その華と見られたオリンピツク、ゲームスも、紀元後三九四年即ち第二百九十三回のオリンピアドの第二年目に、ローマのセオドシアス皇帝に由つて廢止されてしまつた。

第十節

オリンピック、ゲームスのギリシヤ人に及ぼせる影響

このゲームスの全盛時代に於ては、ギリシヤ人の生活及び品性に及ぼせるその影響は、最上の意義あるものであつた。同一の興味に支配され、同一の宗教的儀式を遵行する事が、ヘラスの各地方から、この祭典に参加せる者に、友誼上の好感を生ぜしめたる利益は勿論であるが、それにも増して、意義のあつたのは、それがギリシヤ人に、完全なる生活といふものの理想を示し、その教育に影響を與へた事である。これに就てルシアンは次のやうに言つて居る。ギリシヤの児童及び青年が日頃身體を鍛錬するのは、唯競技に於て賞與を得る爲のみではない。これを得る人数は少数である。それよりもこれに由つて、國及び個人が一層大なる利

益を得んがためである。その獲得する冠は、橄欖の枝などで編まれたものでなく、人間の幸福であり、個人の自由であり、祖國の自由である。又富であり、名譽であり、祖先傳來の祭禮の喜びであり、家族の安全である。換言すれば、神々から授けらるゝを祈るあらゆるこれらの福を授かることである。この冠にはこれらの福が編み込まれて居るので、つまりは身體の鍛錬と辛抱の結果であると。

第十一節 スバルタ人の教育

體育に由つて教育を行ふことを、徹底的に實現した國はスバルタである。スバルタの教育は人民を有爲の軍人とするにあつた。スバルタの市にはこれを防護する外圍の壁はなかつた。スバルタ人の胸が、防護の壁であつたのである。従つて身體の頑強と品性の鞏固とが、青年訓練の全

部であつた。

それで子供が生まれると、検査官の検査を受け、身體の強健なる者だけが育てられ、薄弱な者は山中に捨てられ、飢寒の爲に死を待たねばならなかつた。七歳になると男の子は父母の許を去つて、公共の學校に送られ、厳格な訓練を受けた。着物は薄い一枚に限られ、僅かの食物を給せられ、饑餓、寒暑に堪へ、困難缺乏に屈せない習慣が養はれた。

彼等は體操、競走、角力、拳闘等の身體的鍛練を行ふ外、山野を跋涉して狩獵をなし、困難疲勞を凌ぎ、膽力を養成した。かくて意志を強め、克己の力を養ひ、感情を抑制して、外部に表はさず、寡言靜肅にして嚴格なる態度を持することを期した。青年は二十歳になると兵營に移つて兵士となつた。而して一生國家の干城たる事がその第一の務であつた。かくの如くにして鍛へられたスバルタ人が、不屈不撓、勇敢にして死を

恐れざる武士となり、一朝有事の時、スバルタ魂を發揮して、歴史にその芳名を留むることを得たのは當然である。

第十二節 アテネ人の教育

アテネに於ける教育は、スバルタの身體の鍛練と尙武の一方に偏したものでなく、前にも述べたやうに、ミュージックとジムナスチック、即ち文武の兩道を修めるにあつた。アテネでは法律を以て學校及び兒童就學を規定したこともあるが、實際はスバルタと違ひ、國家の支配に由らないで、父兄の自由に任した。プラトーンやアリストートルは、この教育の自由は、アテネの國民性を維持する上に不安であると反對したが、その結果は憂ふべきものでなかつた。

アテネでは、七歳までは家庭で普通に遊戯などをして暮らし、七つに



習練躍跳の年青
(畫様模の瓶古ヤシリギ)

なると學校に通學したが、系統的に體育を受けたのは、十二三歳からであつた。この年頃になると、學校に通學すると共にパレストラ *Palæstra* といふ體育所にも通つて、身體の練習をする。そこでは角力、投槍、跳躍、乘馬などをやる。跳躍疾走、舞踏等の練習には、筋肉の努力を増す爲に、石や鉛で作つた重いハルテレス *halteres* といふものを、両手に持つてやつた。これは今日のダンベルの前身ともいふべきものである。角力等は裸體になり、皮膚に油を塗り、摩擦してから行ふ



槍投の年青

も非常に重きを置いて子供を養つた。

男兒が十八歳になると、壯丁 *epheboi* といふ事になり、パレストラを去つて、ジムナジウム *Gymnasium* でジムナスチックを行ふ。パレストラは私立で、體育の教師の設立する所であり、國家の監督を受くるに止まるが

のである。パレストラに於ける體育の教師をペドトリバイ *Pædotherhai* といふ。これは子供の身體を摩擦する人 *boy-rubber* の義であつて、皮膚に油を塗る事が、體育に如何に大切であつたかが分る。これは教師が練習者の筋肉の運動を一層よく見ると、肉體美を賞する爲とであつた。またパレストラでは、行儀作法といふ事に



部内のムアジナムジ
(畫様模の瓶古ヤシリギ)

ジムナジウムは公立である。前者は各村に後者は各市に、少くも必ず一ヶ所はあつた。此所では主として軍人としての訓練を受ける。こゝには壯丁の外大人も來て練習し、競技もする。競技者 *athlete* なる語は、*athlon* 即ち *prize* 賞與の義であつて、アスリートは賞與の爲に競技する者である。それでオリンピックク、ゲームスの選手は、アスリートなのである。その選手たらんとする者も、ジムナジウムで練習した。練習はすべて非常なる嚴格と注意を以て指導され、各人の特長を發揮

せしめるやう、最大の配慮が拂はれた。運動のリズムをとる爲に笛を吹くこともあり、特に優美な舉止の練習の爲にもしたダンスにはよく笛が伴つた。ジムナジウムには體育運動の外、哲學者は哲學を説き、雄辯家は雄辯術を教へ、市民は政治を談じなどして、暇を潰したので、ジムナジウムは、ギリシャ生活の中心點 *the centre-points of Greek life* となつた。従つて始めは體育と練武だけであつたが、後にはこゝで、ミュージックも學習したのである。*Gymnasium* は *gymnos* 即ち裸といふ語から來たので、運動競技は、バレストラでも、ジムナジウムでも、オリンピックク、ゲームスに於ても、皆裸體で行つたのである。それで今日存して居る古代ギリシャの力技者の彫刻が、皆裸體であるのも、事實その通りであつたのである。日本でも今日西洋風に裸體の彫刻をするが、これは我々の生活の實際とは違ふことをして居るのである。眞に身體の美と發達を示すには、

衣服は邪魔であつて、さうしても裸體でなくてはならぬ。衣服を着けても身體美を示す爲には、薄くて、身體にすなほに従ふやうなものでなくてはならぬ。この點に於て、我が國の衣服の如きは、最も不適當であつて、身體と衣服が別々の行き方をして、身體美を表はすよりも、寧ろ發育不完全なる又は畸形なる身體を隠すに適する。國民體格の改良は、衣服の改良をも要求するものである。

アテネの人も、祖國の爲に忠實に働き、一層偉大善良なる國と爲してこれを次代に遺さんことを志した。従つて戦争に於ても、卑怯の振舞せず、友を見棄てず、死を以て國を防護し、又祖先傳來の神殿及び宗教を冒瀆せざることを念とした。

要するに古代ギリシヤの體育は、その全盛健全であつた時代には、その生活の状態に最もよく適應し、又祖國に忠誠に、自恃心強く、心身の

好く調和せる人といふ、ギリシヤ人の理想を實現する上に、與つて大に力があつたのである。

ギリシヤがローマに征服せられて、その獨立を失つてからは、ギリシヤの教育もその精神を喪つて、ただ形骸に過ぎないものとなつた。獨立の政治的生命が無い爲に、思想は概して内容の無きものとなり、雄辯も唯言語の弄びで、目的のないものとなつた。體育もその本來の目的を失ひ、最早祖國防護の準備の爲でなく、唯慰みのものとなつて、品性を陶冶する力がなくなつた。且少時の教育に於ても、體育の時間は少くなり青年となつては、體育は行はないで、雄辯術や論理を學び、慰みとしては、室内に在つて飲酒や勝負事に耽るやうになつた。従つてオリンピックク、ゲームスも墮落し、遂に廢滅を見るに至つたのである。

第二章 ローマの國民性と運動競技

第一節 運動競技に對するローマ人の態度

古代ギリシャに於ては、その全盛期には、運動競技が盛んであつて、最もよくその國民性を代表せるものであつた。然るにローマに於ては、運動競技はギリシャのそれとは、その精神を異にし、又國民性の發露として見るべきほど、重要なものでもなかつた。初期の共政國時代に於ては、子供の教育は全く家庭で行はれ、その目的は道德的實用的であつた。體育は主として、兵士としての準備の爲に行ひ、疾走、角力、水泳、投槍、騎馬の練習をした。大人はチベリス河に近き練兵場 Campus Martius で軍隊の訓練を爲し、その後で汗や塵を流す爲に、チベリス河を泳ぎ渡ることをした。

ローマ人がマセドニアを征服してから、ギリシャの文化と接觸するを得たが、その文化はもはや廢頽したものであつた。又ギリシャの運動競技は、餘りに理想的、美的のものであつたから、實用主義のローマ人には十分同化される事ができなかつた。小さい私立のジムナシウムを富有的市民の設けた者もあり、又皇帝ネロは公共のものを設けたが、青年はそこに行くべき義務もなく、體育もその本來の目的を失ひ、ギリシャに於ける如き熱心なく、道德的價値なきものであつた。ローマ人は怠惰で愉快に時を過ごす爲に入浴を好んだが、ジムナシウムは、浴場に接近して設けられるに過ぎなかつた。子供は身體の發育と敏捷を得る爲に種々の球戯を行つたが、それも後にはその意義を失つて、唯の慰みとなり、その慰みも、ローマ人が奢侈になると共に、大人は行はなくなつて、^陸陸や賭け事を楽しみとするやうになつた。ダンスはギリシャの教育の一

要部であり、又衆人の前に競技するものとしては、ダンスは餘りに高尚で神聖なものとせられた程であつたが、ローマ人は、それを自由民に僞ひせざるものと考へた。

ローマ人、特に帝國時代のローマ人は、競技を愛した。しかしそれは唯競技を観るのを愛したので、自由民が進んで自ら行ふのではなかつた。競技場に裸體で現はれ、公衆の前で競技することは、ローマ自由民の威嚴を傷くるものと考へたからでもある。その代りに彼等は刺戟の強烈な又残酷な見物を喜んで、劍士の眞劍勝負や、人と野獸又は野獸同士の格闘を観て樂んだ。而して一方教育もギリシャより傳へたものも、その眞面目を失つて、唯空虚の形式的のものとなり、道德、趣味の廢頽と相俟つて、さしものローマ帝國も遂に衰滅するに至つたのは、怪しむに足らない事である。

今ローマの帝政時代に於て、如何にローマ人の精神が廢頽し、趣味が野蠻的であつたかを示す爲に、コロッセオに於けるローマ人の享樂の有様を述べよう。

第二節 コロッセオのことども

その昔、ローマ人が世界の覇者となつて、氣は益々傲り、快樂に耽ること愈々甚しきに至れる時、もはや尋常一樣の手段では何人をも樂ましむることが出来なくなつた。そこで非常に強烈な刺戟に由つて神經を興奮せんとした中で、最も喜ばれたものは競技と饗宴とであつた。従つて何かの公職に選舉せられんことを願ふ者は、必ず人民の喜ぶ催しをやつて之を觀覽せしめ、先づその歡心を買はねばならなかつた。そして之を觀て満足を感じなければ、彼等は「麵包と競技」panem ac Circenses を要求

することを叫んだものである。それでローマ人が大勢住んで居た地方には、これらの樂しみの爲に集つた觀劇場 anfiteatro の遺址が今日でも諸方にある。それには、丘の麓を切り開いて周圍に層々圓形の座席を作り、中央の廣き平地で催される競技格闘を見下ろすやうにしたのもあり、又土地が平坦で掘るよりも建てる方が便利ならば、地上に高く築き上げたものもある。

これらの觀劇場の中最も宏壯で有名なもの、云ふまでもなくローマのコロッセオ Colosseum である。コロッセオは、第一世紀に、ゼルサレムの征服者なるヴェスパシアンと、その子チタス兩帝の築造にかゝり、世界最大の觀劇場である。位置はローマの七丘の間の谷地にある。築造の材料は外部は花崗石、内部は稍軟かい石灰石であつて、堅牢でよく出来て居るため、十八世紀の末まで殆んど完全に残り、今日でもローマの最

大驚異の一となつて居る。

コロセオは楕圓形で、内部の廣さは五エーカー(二町歩餘)ほごある。外壁は直立して層々に積み上げられ、各層の壁には、アーチ形の空間が水平に列んで居る。觀覽席は外壁の内面に沿うて設けられ、下層ほど前方に突出して居て、遙かの上の壁際と、一番下の内壁との間には、多数の仕切りと通り路とが出来て居る。中央の廣場をアリーナ arena といふ。アリーナとは砂のことで、場内に砂が撒かれて居るからである。ローマの皇帝が大に見えを張り、贅澤になつた頃には、砂に金屬の鱧粉や朱を混ぜ、寶石の粉末を入れたことさへあつたといふ。しかし、軟かい白い石の粉の方が、厚く撒くと雪のやうになるから、一層趣があるとせられた。アリーナの外圍には清水が流れて居た。内壁の一部は一段高くなつて居て、廣い壇が設けられ、そこには皇帝の玉座があり、その傍には、

黄金や象牙で飾つた高官の椅子と、處女なる神女の席とがあつた。その上の廻廊には、騎士及び身分ある人々が着席するので、遙か上の後ろの廻廊は、ローマの自由民の席である。さうして、一番上に、壁に沿つて臺が出来て居て、貴婦人席となつて居る。これは、アリーナに現はれる人々には裸體の者もあるから、神女の外、婦人は近くから見ることはぬのである。婦人席の圍ひの合間には、長椅子が詰められて、そこから下級の人民は見物することが出来る、斯様にして一杯容れると、コロッセオには八萬の見物人が入つたといふ。しかし野天で屋根はない。それで雨でも降るか日射が強ければ、金絲の入つた絹の覆ひが、綱を引張つて繰り擴けられたのである。覆ひの色は紫が一番好かれた。それは紫の覆ひに日が射すと、雪の如きアリーナと、市民の着て居る紫で縁を取つた白色のトীগーガ togas に、美しい薔薇色が映るからである。

コロッセオに何か催しがあると、群集は早くから入場して、高官の到るを待ち、人氣のある人ならば喝采を以て迎へ、嫌はれ者ならば叱咤の聲を放つのである。さうしていよく、皇帝が臨場して、天蓋の下の座席に着くと、「すべての主、第一人者、最大果報者なる汝を歓迎す、永久汝に勝利あれ」との叫聲が、群衆から起るのである。

第三節 動物の演技格闘

皇帝が席に着いて、相圖があると、見せ物が始まる。先づ象の綱渡りがある。それから貴女が外出する時椅子を擔がせて乗るやうに、一匹の熊が貴女の如き服装をして椅子に乗つて現はれ、又一匹の熊は法律家の服を着て二本足で立つて、辯護の主張に同意を求むるが如く歩き廻ることもある。又時には獅子が頭に寶石を鑲めた冠を戴き、ダイヤモンドの

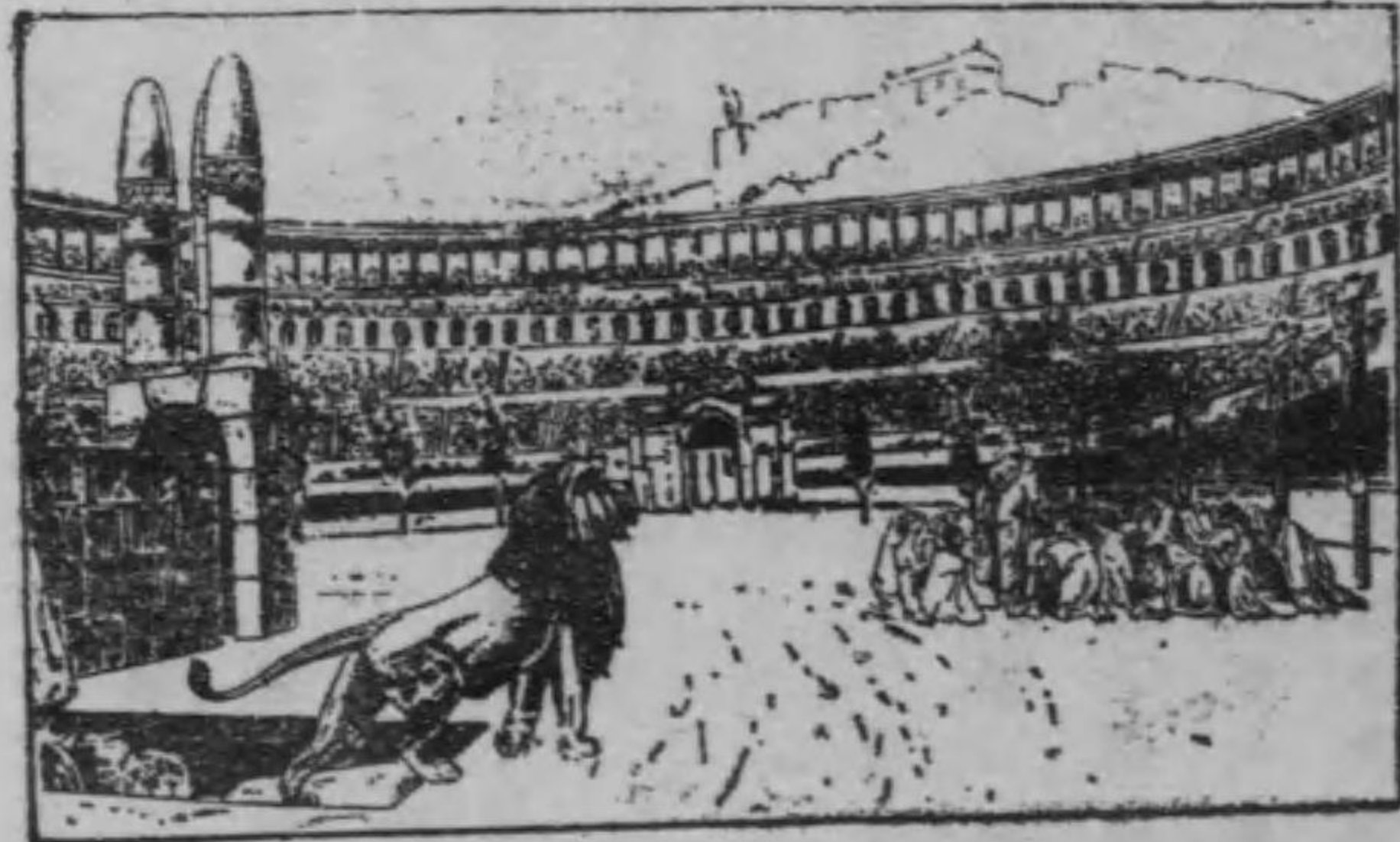
首輪を飾り、金糸で鬘を辨み、爪に鍍金して出て来て、兎をおもちやに種々道化じみたことをする。それから十二匹の象が出て来る。六匹の雄は、トীগを着、六匹の雌はヴェールと外套を着けて、象牙のテーブルの周囲の席に着き、附近の見物人に蔷薇水をふりかけつつ、作法を亂さず食事をなし、舞踏服をつけた同類のお客の入場を待ち受け、花を撒いて舞踏を始めることもある。

時には水をアリーナに満たして船を走らし、中央で船が毀れて、中から種々の動物が出て、あちらこちらと泳ぎ廻るのを見たり、希臘神話中のオルフェウスの話が仕組まれて、音楽師の琴と歌に連れて、地下から黄金の實のなつた木がせり出し、之を一層寫實的ならしむるために、そのオルフェウスが生きた熊に食ひ殺されるのを見ることもあつた。

コロッセオは、唯罪のない見物をするためにのみ、建てられたのでは



オセツロコのマーロ



後最の法教普基るけ於にオセツロコ

なかつた。氣象の激しいローマ人は、強い刺戟で興奮せられねば納まらなかつた。そこで、アリーナの周囲の坑や、洞穴の戸が開かれて、少しも馴らされない、全くの野獸、即ち、犀や、虎や、野牛や、獅子や、豹や、猪が出て来て搏噬争闘するのを、蠻的好奇心を以て見たのである。もし野獸が恐れて動かぬか氣が沈んで居れば、その激怒を起さすために野牛には赤いもの、野猪には白いものを目の前に突きつけ、又は赤熱の光つた棒で突いたり、鞭音を高く鳴らしたりして怒らしめ、その互に殺戮を始めるや、猛獸の咆哮に耳を樂ましめ、その搏噬に目を喜ばして飽くことを知らなかつた。

さうして、一匹が殊に悍猛で、他の野獸の總べてを殺した時には、群衆は之を故郷の森に放還せんことを望み、「勝利、勝利」の喚聲の中に、犠牲の死屍を乗り越えつゝ、アリーナを一巡するのであつた。かくて、

殆んぞ信ぜられぬ程の多数の動物が、競技争闘の爲にローマに送られ、地方の太守は獅子や象や虎などを狩り集めるのを一つの職務として、その獐猛で新奇なものほど評判が好かつた。しかし、ローマ人にも潔癖があつて、血を見るのは好きだが、其の臭ひが嫌ひであつたから、沸騰せる葡萄酒に香料やサフランを混じて蒸氣を立て、管を傳つて場内に送つて、そして血の臭ひを消して居たのである。

第四節 人間と猛獣の格闘

しかし猛獣と猛獣との争闘だけでは、ローマ人には物足らなかつた。そこで、引き出されたものは人間であつた。人間が猛獣と闘はねばならなかつた。初め頃は人間は十分武装して現はれ、大概敵手の猛獣を倒したが、後には武器無しに、無手で獅子に立ち向ひ、敏捷と熟練で以て獅

子を倒すこともあつた。しかし、ローマ人の見んと欲するものは、唯の熟練ではない、死であつた。死刑の宣告を受けた罪人や逃亡者を、獅子の犠牲となして、その死様を見るために取つて置かれた。其の中には基督教徒もあつて、落付いた決心と希望の喜びとを以て、鬣に血糊のついた獅子の襲撃に遭ふのを、不思議がつてローマ人は眺めて居た。従つて其の不思議な理解すべからざる光景が最もローマ人の氣に入つて、催しの當日、最後の最も取とぎの見ものとなつたのである。

第五節 人間同士の格闘

猛獣と人間の争闘のみならず、人間同志の眞剣勝負も行はれた。猛獣の死屍が熊手で引き出され、血に汚れた砂が清められ、香料の雲が一層高く昇る時、男子の行列が繰り込むのである。剣と蹄繩を携ふる者、三



（館物博ルヴリル巴）士 劍 ぶ 圖

又戟と網を持つて
 る者、輕装の者、
 重装の者、徒歩
 の者、騎馬の者、
 戦車に乗れる者、
 いづれも血氣盛
 りの、丈高く骨
 格逞しからざる
 者はない。彼等
 は皇帝の前に進
 み一揖して、「シ
 ーザー萬歲、今

や死せんとする者、汝の幸福を祝す「Ave, Caesar, morturi te saluant」と一度に
 叫ぶ聲は、場内に響き渡るのであつた。

これらの劍士 *Gladiators* は通例奴隸で、群衆を樂ましむるために死ぬる
 やう、武術を練習した者である。しかし之を職業として傭はれて出る者
 もある。その幸に命を全うした者には、退いて老年を安靜に送る者もあ
 るが、ローマ人は、用のない者には餘り恵みはかけなかつた。

格闘には、一人勝負もあり、大勢入り亂れての切り合ひもあつた。一
 人勝負で對手を傷けた時は、勝つた方が群衆に向つて、傷いたがどうし
 ようかと云つて、その處分を問ふ。もし人民が拇指を上げれば、助かれ
 ば助けてやれといふ合圖で、拇指を下ければ殺して仕舞へといふ事であ
 る。もし對手が殺しかねて居れば、「刃を受けよ」*Recipe ferrum* との輕蔑的
 叫聲が放たれる。而して人民は勿論、高位高官の者も、神に仕へる乙女

も母親も、コロッセオの石段を昇ると、それらの流血の悲劇を面白い見物として、飽かず眺めるのであつた。斯る特權を有する者には、見物席からわざわざアリーナに下りて来て、負傷者の斷末魔の苦悶を檢し、殊に勇敢なる犠牲者の血を嘗める者もあつた。それが濟むと、次の格闘の邪魔にならぬやうに、死骸が運び去られる。ローマ人は劍士の格闘を非常に喜んだもので、これを行はぬと、公衆の人望を博することはむづかしい程であつた。(頻死の劍士、卷首挿圖參看)

第六節 格闘の廢止

しかし、かゝる残酷なる享樂は、何時までも續くことは出来なかつた。皇帝が基督教を奉ずるに及んで、死と残酷とに愉快を見出すが如き觀劇を禁止せんことを努め、信心深き者はこれに出席するに忍びざるに至つ

た。しかし永き習慣と強き刺戟を喜ぶの情とは、皇帝の努力にすら打勝つて、ローマが基督教的市となつた後、百年ばかりは、やはり流血のこの悲惨事が行はれ、地方の觀劇場のある所にも、亦これが行はれたのである。

かゝるほどに、ローマの敵は追々と襲來して、北方ゴート人の勇將アラリックは、其の軍を率ゐて伊太利に入り、ローマを脅した。當時の皇帝ホノリウスは、怯懦暗愚爲すなきの人であつたが、將軍スチリチヨが、紀元四百三年北伊太利に迎へ撃つて、全くこれを破つた。その戰勝を祝するため、ローマの元老院は、翌年の初にローマに凱旋式を以てこれを迎へることとなつた。當時は既にジュピターの殿堂の代りに、基督教の寺院に人民は詣り、捕虜の殺戮はなくなつたが、ローマの血に渴する性癖は未だ全く止まないで、凱旋のマーチが終つた後、コロッセオに於け

る催しが始まつた。先づ徒歩、騎馬、又は戦車の競走の罪なき勝負があり、次にはアリーナに熊を放つてこれを狩り、それから劍の舞があつた。それが済むと、槍や刀を持った劍士の勢揃ひがあつて、いよく眞劍勝負が始まつた。人民は蠻的趣味の満足されるのを、歡呼を以て迎へた。

その時突然、粗服を纏つた賤しい一人の老人が、跣足で、アリーナに飛び出して、立ち向つて居る兩劍士の間立塞り、群衆に向つて流血の慘劇を止めることを以てした。群衆は叫び、罵り、わめいて、その言葉を遮つて、こゝは説法の場所ではない、ローマの舊慣は守られねばならぬ。「引込め、老人」「遣れ遣れ劍士」と、群衆は怒鳴つて止まない。劍士は老人を突き除けて打ち合ひを始めやうとした。老人は猶も兩劍士の間立つて、その主張を聞いて貰はうと言ひ争つて居る。「邪魔だ、引ずり出せ」と、見物人は一齊に叫び、劇場取締のアリピアスまでが之に和し

た。劍士は仕事の妨害を憤つて老人を切り倒した。激昂せる人民は、石でも何でも有り合せの物を、老人目にかけて雨の如く投げつけた。老人はアリーナの中央で殺されて了つた。その横はれる死骸を見て、初めて人民は我れに返つて、何をしたかの悔悟が起つて來た。

殺された老人は、祈禱と克己の聖き生活に身を捧げ、心無き者にも非常に尊敬されて居た隠者の一人である事が、その着物で分つた。前に見たことのある人の話によれば、この老人は、ローマの社寺に參詣し、クリスマスをこゝに迎へんが爲に、アジアの荒地から巡禮をして來た者であつた。彼等はこの老人の聖き人なることを知るのみで、名はアリマカス Aymachus といつたか、テレマカス Telemachus といつたかも、よく知らなかつた。兎に角彼れは、人が互に殺し合ふのを見んがために、數萬の群衆の集れるこの有様に心を激動せしめ、その單純な心で、一圖にこの

殘酷を止めるか、自分が死ぬるか、どちらかにと決心して、覺悟をもつて飛び出したのであつた。

彼れは死んだ。しかしその死は無益ではなかつた。群衆の目前に於ける老人の死は、彼等の心を一變した。彼等は、無闇に殘酷と流血とを行ひ來つた事が分つた。この隱者がコロッセオで死んだその日から、劍士の相殺的格闘は永久に無くなつた。羅馬のみならず、ローマ帝國の各地方でも、この風習は全く廢止された。即ち少くも一つの慣習的罪惡は、一人の賤しい身元の知れぬ名さへ殆んど分らぬ隱者の犠牲に由つて、地上から全く拭ひ去られたのである。

第七節 中世より現代まで

中世に於ては、基督教會は、肉體は肉慾の府であつて、人を墮落せし

める源であるとして、これを輕んじ、人は罪の子であるから、人の氣に入らぬ程神の氣に入り、救はれ得るものとして、身體を苦しめるものすらあつた。しかし人民には狩獵、鷹狩り、弓術、釣魚などを慰みとして行ひ、又疾走、跳躍、角力、水泳などを行ふ者もあつた。中世には、匈奴やゼルマン種の蠻族があつて、歐洲の一部又はローマ帝國を脅かしたが、彼等は屈強な身體を有し、戰爭に堪へる爲に身體を鍛へ、武技を練つたが、文化の程度は甚だ低くいものであつた。中世には騎士なるものがあつて、一種の武士道を遵守し、武人としての教育を受け、戰爭に従事したが、一般人民の間には體育は重要視せられなかつた。

文藝復興期に於ても、精神の自由、解放はあつたが、一般に身體の方面は余り顧みられなかつた。體育論を書いた人はあつたが、古典の燒直しに過ぎないで、主として王族や貴人の爲のものであつた。ミカエル、

アンゼロの彫刻、繪畫には力の表現と見るべき豪壯な身體はあるが、それはこの時期に起れる解放されたる精神の活動の象徴である。十七、八世紀に於ても、ロックやルソーの如き、體育の必要を力説した者はあつたが、それは唯言説に止まつて、實際のこれに伴ふものはなかつたのである。

體育の盛になり出したのは十九世紀の後半である。それにはナポレオン戦争の影響もあり、特に一八七〇年獨佛戦争の結果が、各國の國民に體育を奨勵する強い動機となつたのである。國家の隆昌の爲には、又國際競争に於て優者たる爲には、道徳的に、知的に優者であると共に、國民が身體的に優者であらねばならぬとの意識が盛んとなり、その結果各國競つて國民の體育に銳意熱中するに至つた。即ち十九世紀の後半に於て、前の文藝復興に對して、身體の復興 *Physical renaissance* があつたので

ある。

體育といつても種々あり、又各國に於てその特色がある。しかし體育の事を説くのが、本書の目的ではなく、運動競技及びそれを通じて見た國民性に就て述べる積りである。それには第一に英國に於ける運動競技の有様を述べねばならぬ。何となれば、運動競技は、英國の國民生活の重要な一部であつて、運動競技を離れては、その國民生活は不完全なものであり、又英國人の活動、事業を理解することも不可能であるほど、それ程運動競技が國民生活の血となり肉となつて居るからである。それ故英國に關するものを、少しく詳しく述べようと思ふ。

第三章 英國に於ける運動競技と國民性

第一節 英國人の田園的生活

英人の性質に就て、正確な觀念を得ようと思へば、唯都會の觀察ばかりではいかない。どうしても田舎に往つて、村をうろつき、お寺、農家、別莊を訪れ、公園、花園に行き、祭や市を見、その住民を観るの必要がある。我が國に於ては、大きな市が一國の富を吸集し、文明を代表し、田舎は殆んど農夫ばかり居るところであるが、英國は之と反對で、都會は大集會所であり、一年の或る部分（特に冬に芝居や、舞踏音樂のある時）ばかり都會に出て、それが濟めば、再び田舎に歸つて生活するものが多いから、英國の到る所に種々の生活の者が住居し、最も偏鄙な所にも、文化生活をして居る者がある。英人は深き田園趣味を有し、自然を

愛し、田舎の樂しみ喜びを味ふ事を好むが、この嗜好は傳來のやうである。市に生れ、變化の劇しい忙しい街道の中に、養育された者でも、この田園的習慣に適應することが容易で、其術を良く會得する。商買人でも其ロンドン附近の住宅に於て、花園を耕やし、果物を栽培することに於て、熱心と得意を示すことは、尙商買上の事柄や、成功に於けるやうである。都會の熱鬧中に生活をせねばならぬ者でも、自然の趣味を有つて居つて、少しの地面にも、花卉を植ゑ、家の窓には、植木鉢を並べて居る。各の廣場(スクエア)は、小公園のやうであつて、芝草を植ゑ、新鮮なる緑を以て飾られて居る。日中都會で忙しい活動をして居る者でも、一度び退いて其田舎に於ける生活を見れば、市の熱鬧、劇務から解脱して、愉快に且遠慮なき人となり、窮屈を離れ、打ちくつろいだ生活ををする。其田舎に於ける住居には、書籍、繪畫、音樂、運動器械等を備

へ、馬や犬を飼つて居る者もある。室の内外の裝飾にも意匠を凝らし、客に接するにも親切で、之を慰むる有らゆる手段を備へて居る。英人の田園的趣味は、又土地の耕作、園藝に於て著しく表はれて居る。彼等は自然をその奥底から研究し、自然の美しき形、調和せる結合に就ての正確なる感じを有し、他國に於ては荒地として抛棄するものも、一度び英人が手を付けると、立派な景色となり、土地となるのである。

英國の公園は、芝草を一面に植ゑ、散歩のみならず、車を驅り、馬を走らすために、非常に廣い場所を取つて居る。一體英國の公園は、平面的で、一部に樹木を植ゑ、池水を湛へ、其外は一面の芝草であるから、岡陵起伏して、谷あり、瀧ありといふ山水的のものではなく、如何にも廣々として居る。英國の公園には、一種の様式があつて、大陸の公園とは、その平面的に廣くて芝草のある點に於て異なつて居る。英國の公園

は運動に適し、氣分が暢び暢びするやうに出来て居る。

ロンドンには公園の大なるものが澤山ある。市の中央のハイド、パークは一五八ヘクタール（一ヘクタールは、二エーカー半弱、一エーカーは我四反十八歩許）の廣さを有し、其西に隣れるケンシントン公園も殆ど同大である。其東にはグリーン、パーク。セント、ゼームス、パーク。パレース、ガーズンズが相連り、テムスの河南には、バターシー、パーク（七十五ヘクタール）があり、市の東北にはビクトリア、パーク（百十七ヘクタール）がある。其外郊外には、西にリッチモンド、パーク（二千二百五十五エーカー）、キュー、ガーズンズ。西北にはハムブステッドヒース。東にはエツピングの森（五千五百エーカー）などいふ廣大な公園があつて、ロンドン市民の心を洗ひ氣を晴らす所となつて居る。それで土曜、日曜、祭日等には、數百萬の市民が、これらの公園に出かけて、

散歩し、運動場をかけ廻はり、馬に騎り、車を馳せ、ボートを漕いで、愉快に遊ぶ様は、實に見物である。元氣の充實した規模の大なる人民を作るには箱庭的の公園はいかぬ。數百萬の都會人民が、思ひ存分遊び廻れる様な廣々とした公園が欲しいのである。英國の公園はそれである。

英國はひとり其公園が公園たるのみならず、實に英國全體が一大公園である。田舎の憐れな破れ家でも、葛蔓がまとひつき、紅の花が笑ふて居る。土地は殆んど牧場で、青々した草が一面に地を覆ひ、瘤柳、楊などが、コンモリとして姿勢よく並び、牛、馬、羊などの嬉々として戯れて居る様は、我國では見られぬゆつたりした景色である。日本の景色は鋭くて神經質である、ユツタリした所がない、人民もさうである。

英人のかゝる田園的趣味は、其健康なる身體と品性を作り上ぐるに與つて、大に力があるので、又文學上少なからぬ影響を與へて居る。英國

には天然を歌ふ詩人が多い。

第二節 英國人の體格及び性質

英國人は、一體身體が丈夫で、永續きがする。其身長も他の國人よりは高い。歐洲の大陸から、英國に來たものは、獨り男子のみならず、女子もならずして丈の高いことを認めるであらう。自分は英國の公園で、最も多く大女に出くはしたし、國會議員にも六呎四吋位の人は居る。エマソン曰く、往來を行く百人の英人を取つて、目方を掛けたら、百人のアメリカ人よりは、四分一位は重いであらう。自分が初めてリバプールに上陸した時に、運搬人、車夫、番人等、總て頑丈に出來て居るを認めた。ロンドンのチャーチテムブル等に於ける中世の十字軍の軍人の記念像は、今日英國で見る最良の若い人と同じ型である。兩方とも同じ性質

の美、勇氣、精鍊、及び良き性質を混ぜた顔付きをして居る。ロンドンの巷を通ると、男らしい顔をした無垢の青年を見ることが出來ると。英人の顔は概して立派であつて、決斷と剛毅を示して居る。元來英人には昔諸方の人種の渡つて來たものがあるから、色々な血が混つて居るが、其サクソンに屬する人は、開いた額、質朴で親むべき風采を有して居る。英人は戦争好きといふよりは、寧ろ男らしいのである。それで戦争があつても、濟めば再び親むべき者となり、婦人には親切である。是等の性質の結び附いたものは、ギリシヤのヘルマフロダイトに於て見ることが出来る。英人の心には男女の兩性が同時に宿つて居り、勇氣とやさしさの兩方面を、一人で持つて居る。トラファルガーに於ける瀕死のネルソンは、其の友ロード、コリングウッドに、彼れの愛情を致し、寢床に行かんとする無邪氣な學校生徒の如く、「我れを接吻せよ、ハーディー」と

言つて死んだ。クロムウエル、ブレーク、マルボロー、チャサム、ウエリントンの如き、皆此種の人で、温和と勇氣、優しい所と恐るべき性質を兼ね備へた人である。

英人は一體に健康で、丈夫で、老年に至るまでも體力が續く。老人も血色がよく、いつまでも薔薇色をして居る。清き皮膚、良き齒は、英人の誇りである。彼等は牛肉、羊肉、小麦のパン等滋養に富める物を澤山に食ふ。エマーソンのいふやうに、働く者は芹では生きて居れぬ。又眼の良いのも著しい事である。一般人民は勿論、學生でも眼鏡をかけて居るものが甚だ少い。これも野外生活を好み海に親むお蔭であらう。人民は良い物を食ふといふのを一般に誇りとして居る。

第三節 狩 獵

英人は體力に富んで居る。彼等は男らしき運動は、精神を高め、他人を凌駕する性質を與ふる基と考へて居る。彼等は、アラビヤ人の如く、狩りに費す日數は、壽命の長さに勘定すべきものではないとして居る。彼等は打球し、競走し、弓を射、馬に乗り、船を漕ぎ、海を航する。彼等はよく食ひ、よく飲み、よく眠つて、野外で面白く生活する。彼等は道を行くにも疾く歩む。佛蘭西人は言ふ、往來に於ける英人は、常に狂犬の如く、眞直に脇目も振らず歩いて居ると。彼等は好んで獵をする。獵は身分ある英人の技術である。彼等は、鷲や鷹が肉食の動物なるが如く、世界に於ける最も飽くことを知らざる肉食の人間である。各の季節は、貴族を銃獵又は漁獵の爲に田舎に送り出す。又歐洲大陸、アメリカ、アジア、アフリカ、オーストラリアの方に出掛けて、鐵砲や、ワナや、モリや、犬や、馬や、象や、駱駝で遊獵をする者もある。ベンガルの虎、

アフリカの獅子は、彼等の獵の御土産である。佛人は一匹の鹿を射止めても、非常な名譽で、獵仲間には握手する、婦人は接吻するといふ騒ぎであるが、英人の眼中には、鹿や兎は抑、末である。彼等は北極の熊と戦ひ、ナイルの鱉と争はねば承知しないのである。英國は探検家を多く出す國である。

内國での獵は、通例秋から春に掛けて行ふのである。兎、狐、鹿、其他の鳥獸には、皆其狩獵期がある。秋にはスコットランドの松鷄ゴウズといふ鳥が好んで射られるので、ロンドンからも出掛ける。好い處になると、一期間に一二萬圓の借料を出して、獵區を借受ける富者、貴族などもある。それで男子は勿論であるが、女子にもなか／＼獵に興味を持つて居る人があつて、色々な俱樂部を作り、犬の共進會等もあつて、犬の種類によつて、之を評價する審判者にも女子が居る。又罾釣を好んでする者

もあつて、やはり高價を拂つて、一區域の川流を借切るものもある。

第四節 英人と動物

世界で最も良く動物を養育し、馴致するのは、英人である。英吉利は最も良き馬を出し、又最も敏捷なる犬を有する。彼等は如何なる土地をも、立派な住居となすやうに、世界の動物を、我物として、自由に養育變化するのである。彼等は犬や猫の如く、獅子や虎を馴らし、豹を花園に飼うて、小供の遊仲間として居る者もある。役に立つ人間は、先づ立派な動物でなくてはならぬ。英人は元氣のいふ、胸廓の廣い、馬や、犬の如き捷敏な粘りのある筋肉を持った被造物クリエーションである。動物を愛する者は、最も好く動物の性質を理解する。英人は、犬や馬を仲間として愛する。犬や馬も仲間として英人を愛する。馬を取扱ふには、勇氣と熟練が要る。

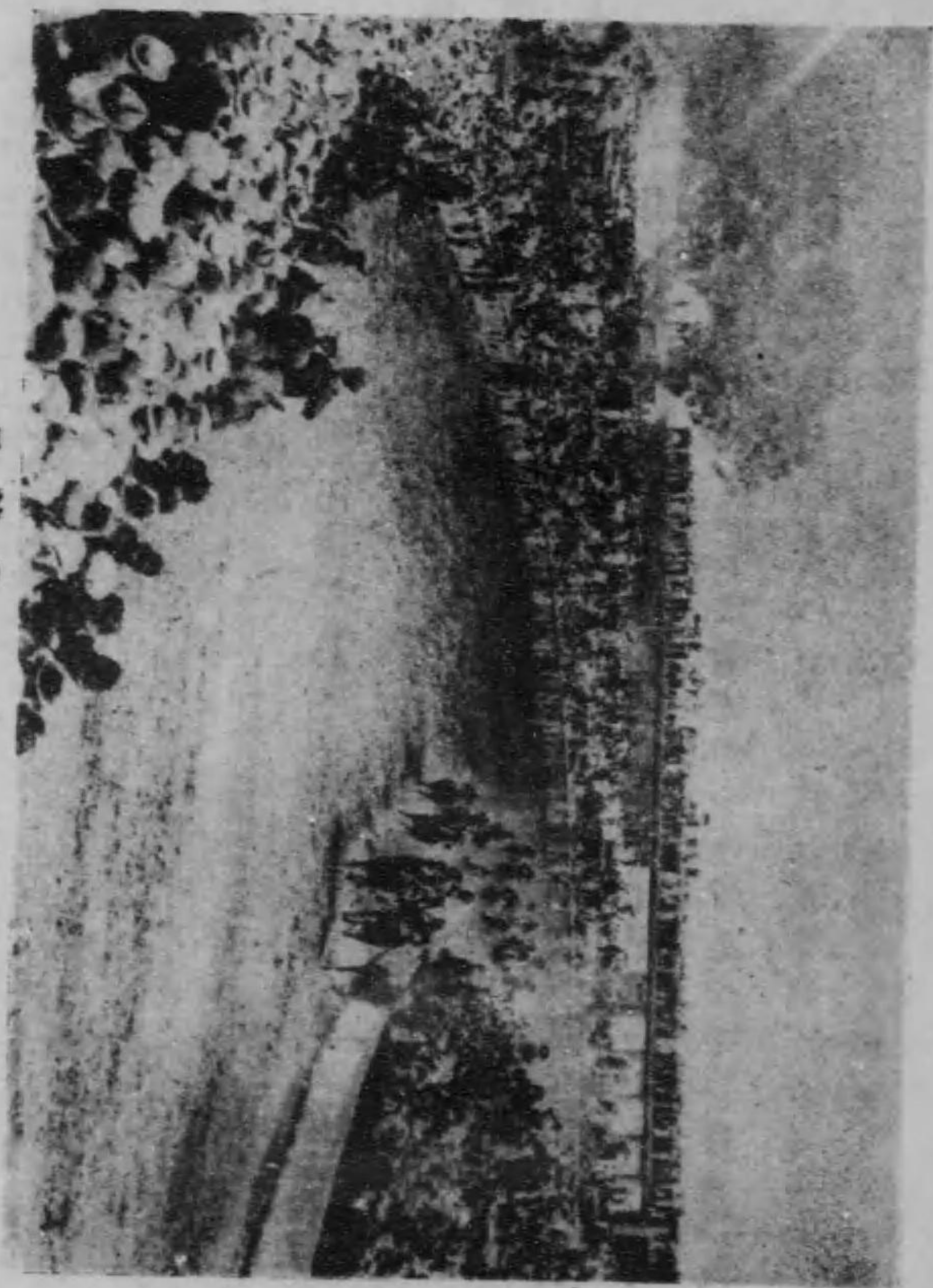
馬は之を恐れる者を直ちに見別ける。英國の強壯な學生は、學校の教授と連れになるよりは、馬と連れになることを好むと云はれて居る。彼等が馬を愛するのは、其由來が久しいので、其祖先のサクソン人又は韃靼人は、馬を御するに巧みであつた。殊に韃靼の遊牧民は、馬が其富であつて、子供は馬の乳で育てられた。デンマルク人の侵入に際し、其掠奪者は其上陸した所の馬を捕へ、直ちに之を馴らして、立派な騎兵の一隊を作つた。彼等は世界に於ける他の人民よりは、能く馬を理解し、彼等の馬は殆ど彼等の第二の我であるといふことを誇る。勝王ウィリアムは、人よりは寧ろ馬を愛し、其狩獵を妨ぐる者には、罰及び科料を課した。彼れは丈高き鹿を愛して、自らは其父の積りで居つた。英國の紳士は、常に騎馬を好み、又その馬を理想的の完全さに育て上げる。英國では、乗馬の紳士の三四十が、屋根の如く峻しい丘を、ギリシヤの神話にある

セントールのやうに走り居るを、屢見することが出来る。馬に對する趣味は、英國一般で、宿屋にも室に競馬の圖を掛けて居るのがあり、ロンドンの銀座ビカデリーには、競馬の圖専門の店屋があつた。婦人にも乗馬に興味を有する者が少なくなく、兎狩などには野外を男子と一所に馬で駆け廻る者もある。日曜などには、少女が公園を馬に乗り連れて行くのを見るのは珍らしくない。此度の歐洲大戰の時には、婦人だけで調馬隊を組織して、馬の訓練に従事した者もある。

第五節 競馬

英國で有名なる競馬は、ロンドンの南十六哩なるエブサムに於ける有名なダービー、及びオークスの競馬である。ダービーは水曜、オークスは金曜にあるので、五月の終りか、六月の初に舉行せられるのを通例と

する。ダービーの競馬は、一七八〇年にダービー伯に由て始められたものである。その驅ける道程は、一哩半で、一八九六年及び一九〇〇年には、之を二分四十二秒で走つた馬がある。ダービーでは、牝牡兩方、オークスでは牝馬だけの競走を許す。しかし馬の齡は皆三歳である。是等の競馬には、ロンドンから、非常に澤山見物人が行く。以前は國會もダービーの日には休會であつたが、今日はそれだけは止んだ。此日は鐵道乗物等は、非常な混雜である。競馬が固より主眼ではあるが、それに伴ふ交際や、色々の店や、見せ物などが多いので、競馬以外にも面白いのである。併し、大に賭が流行する。是は本來の運動の趣旨を失するもので、餘り好いことではない。(巴里にもオートイユといふ所に、秋には競馬があるが、其見物の三分の二位は、賭を當に行くのである)。ダービー、オークスの外にアスコットの一週といふのがあつて、ダービーの二週間



馬競のーポーダ

後に、競馬が行はれる。其金盃日といふのは、木曜で、皇族が公式で観えるのを例とする。其他サンダウン、ケンプトン、パーク、ハリスト、パーク等に於て屢、競馬が行はれる。又エブサムには、夏の外、春にも競馬がある。ダービーにはキングも其馬を出すので、勝つたこともある。一度好い競走に勝つと、數萬圓の賞金が取れるのであるから、平常馬の養育訓練には、非常に注意し、大層な金を出して調馬師を雇うて居る。

佛國の文豪テームは、その著「英國觀察記」の中に、ダービー競馬往觀の事を書いて居るが、その中に、競馬は遠方から見たのでは何でもない。群衆は蟻であり、右往左往する馭者や車は甲蟲のやうであり、赤、青、黄、紫などの服装した騎手は胡蝶のやうであつて、自分には唯昆蟲のゲームを見るやうにしか思へない。それは多分熱心が足らぬからであらう。見たところ、疾走する馬の速さも、遠方の汽車を見るやうで、一

向疾くないと云ひ、競馬の勝負に熱中して、勝敗が極まると、見物人が賭金の爲に血眼になつて飛び廻ることを書いて居る。

第六節 運動及び競技

英人の活潑敢爲なる氣象は、發して其運動競技となつた。又運動競技が、更に英人をして一層活潑敢爲ならしめ、世界を我が本國とするの氣宇を養成することである。然れども英國の運動競技の意義は獨り之に止らず、又その社交上に非常な意義を持つて居るのである。英國は富んだ國であるが、貧乏な者もナカク、多くて、貧富の懸隔が甚だしい。それで此懸隔より來る惡感情を和けるものは、上下が一緒になつて、階級貧富の區別なく、共に遊ぶことが必要である。英國の運動競技は、能く此上下貧富の感情の懸隔、即ち不平を和ぐるの効があるものである。

英國人の運動競技は其由來が古いには相違ないが、今日の隆盛を來したのは六十餘年此方であつて、其以前には運動競技に就ては、新聞も殆ど書かなかつた。唯競馬だけは詳しく書いたが、今日重もなる年中行事の一とせられるオクスフォードとケンブリッジ大學のボート、レースの記事も、六十餘年前には唯二三行を充すに止まり、ロンドンのロージズ運動場に於けるクリケットの如きも殆ど記載されなかつた。併し六十餘年來、再び斯かる運動が盛んとなり出したのである。昔のブリトンは熱心なるフットボール家であつたが、彼等はローマ人の爲に和らけられた。其後侵入して來たサクソン人は、野外に於ける運動を好んだ。これはノルマン人の勢力に由つても變ずることはなかつた。しかし中世に於ける大戦争が起つてから、運動に對する人民の熱心は減じて來た。例へばゼームス一世の如きは、フットボールを嚴禁した。又英國のビュリタン主

義は、運動を妨害するに與つて力があつた。

十九世紀の後半に於て、科學が著しき進歩を來たし、工業が發達するに従ひ、資本家と勞働者の階級が出來て、互に反目疾視せんとするの傾向があり、多くの人民は、終日工場の中に不潔な空氣を呼吸して働いて居るし、又以前は青年が巷の廣場で、無邪氣に群を成して遊んで居つたものが、治安に妨害ありとして、警察が之を禁するやうになつた。又物質上の非常な進歩があつて、贅澤物の多くなるに従ひ、室内生活が盛んになつて、開豁な野外に出て、新鮮の空氣を呼吸し、思ふ存分に運動をするといふことが、追々と少なくなり、人民の健康上、非常な不利益を來すこととなつた。そこで英國の心ある人々の中に、此悲むべき有様を變じて、活氣ある健康なる人民を作り出し、且貧富の懸隔より來る惡感情を取去るには、古へに於ける野外の運動を再興し、英國の青年のみな

らず、一般の人をして之に與らしむるに若くなしとの考が起つた。

新鮮なる空氣は人間には飲食の如く要用である。力のある運動は、睡眠の如く必要である。生活力も腦髓も之に由つて新鮮となる。又人の性質の上にも好き影響を與へ、耐忍持續力を養ひ、自負や神經過敏と戦うて、能く克己同情の念を起さしめ、其他廉恥を重んじ、友情を厚くする等、野外に於ける運動の利益は澤山ある。英國の野外運動は、唯勝負を争ふのでは無くて、我れを忘れて全體の爲に戦ふのであるから、仲間の爲めといふ良き性質を作り出すものである。英國の成功は共同一致して事を爲すにあるのである。其特色は運動に於て現はれ、運動は又ますます其特色を助長して居る。野外の運動に於ては、之に與るものは皆一人前で、此處には富も生れも無い、唯技の優劣如何に由つて區別が生ずるのである。是は社交上甚だ有益なことである。英人は自己の爲めばかり

ではない、國民の爲め、將來の爲に運動をするのであつて、運動は實に英國々民生活の重要なる一部をなして居るのである。英人は皆運動の趣味を解し、教員、國會議員、實業家、労働者、誰彼れの差別なく、長幼共に運動に熱心なのである。

今日英國では死亡の比例が減じて來た。一八七一年には、男子の平均年齢は三十八年三箇月、女子は三十七年六箇月であつたが、一八八九年には、男子は四十八年三箇月、女子は四十三年の平均年齢を有するに至つた。國家はただ人数が多いばかりで、以て誇るべきでは無い。一人の人間がどれだけ長生をして、どれだけの仕事をするかといふことが、最も大事なのである。唯準備に大切な時を費し、成業の曉は身體が虚弱で働く時間は、準備の時間の半分も無いといふやうなことは、本人は勿論、國家の爲に非常に悲むべきことである。英國流の運動競技は、其精

神に於て、實際に於て、大に我が國にも獎勵普及するの必要がある。さうすれば五十で天命を知るとか、六十一で年賀を受けるとかいふことは止んでくる。

英國の運動競技を盛ならしめた本元は、中等教育を施す所の所謂「公共學校」Public schoolsである。是等の學校は私立であつて、古き歴史を有し、生徒の大部分は寄宿舎に住し、各學校の特色を維持し來つたのである。是等の學校の中で、最も有名なのはイートン Eton、ハーロー Harrow on the Hill、ウイチエスター Winchester、ラグビー Rugby 等であつて、古來多くの英國の政治家は、これらの學校で教育せられたのである。而して前の三校は古くからクリケットを以て鳴つて居る。またラグビーの學校はフットボールを以て名あり、終にラグビーのフットボールなる名を得、其規則をも作り出すに至つた。それでこれらの學校を參觀する外國人を

先づ驚かすものは、生徒の體格の立派で男らしい事である。

第七節 運動競技は紳士の資格

英國の紳士たるの資格は相當の富を有し、政治上の意見を有するの外また身體が強壯で無くてはならぬ。紳士はクリケットもやれば、フットボールもやる。國會議員にも運動俱樂部がある。英國の紳士録を見れば、嗜好として、何かの運動をしないものは、殆んど無い位である。英國では、兩親や教師は、子供を小さい時から規則正しく運動競技に與らしめ、其進歩に特別なる重きを置いて居る。英國では教室の無い學校は考へ得るが、運動場の無い學校は考へ得られぬといふ程で、校長も、教員を雇ふ時には、そのクリケット、フットボール等に於ける手腕の如何を問ふのである。運動競技は生徒の必須科であつて、學校の經費の大なる部分

がその爲に當てられる。僧侶も政治家も、特に社會改良家は、少年及び成人の運動競技には、最も熱心なる注意と世話をすることを辭せない。随つて新聞紙も運動競技の出來事に就ては、極めて詳細なる報告をなし、假令政治上に於て意見を異にするとも、運動界の出來事の記事に忠實なることは同一である。即ち英國の新聞紙は、其最も重要な紙面の殆んご一頁を、毎日運動界の記事に献けて居るのである。其外運動競技専門の新聞雜誌も澤山ある。それでロンドンの雜誌店を覗いて目立つのは、これらに關する本や雜誌が澤山あることである。獨り學校生徒のみならず、勞働者も紳士も、能くこれらに關する雜誌や新聞を手にして居るのを、英國では見るであらう。また運動用具を賣る店も多い。英國のステーションに於て、著しく目立つものは、バットやラケットなど運動用具を持つた人の多いことである。日本でも稀れに見る事はあるが、それは

すべてが學生であるが、英國では學生よりも、寧ろ紳士であり、ビジネスマンである。元來運動の趣旨は、純粹に運動を楽しむといふことにあるので、之を職として金銭の爲に競技するのでは無いから、ロンドンに於ける貴族のフットボール倶楽部は、フットボール専門の者とは、競技することをせず、却つてフットボール旅行を鑛山の所在地になして、坑夫とフットボールをやるやうなことをする。五十餘年前にフーベルといふ獨逸人が、英國旅行記を書いて其中に、ベルモントの或工場の職工と、ロンドンのリンコン、インの十二人の辯護士とのクリケットの競技に就て、工場の勞働者が斯かる男らしき競技に與り得る程、身體の敏捷と、心の新鮮とを有することは、案外なことであると云つて居る。職工と若き辯護士が、互に其技を争ふを見る事は、實は其時代には稀れなことであつた。フーベル自らは競技を解せなんだが、此面白い光景には深

く感じたのである。斯かる運動の輸入及び傳播を、フーベルは、工場に於ける労働者の生活を、基督教化するの一動力と認めた。以前は寺院は労働者に對しては寧ろ冷淡であり、労働者も亦宗教に對して冷淡であつたが、僧侶が其聽衆に其閑な時の暮らしに、野外運動の趣味を輸入してより以來、人民と教會との關係も好くなつて來た。僧侶は上流社會、特に其青年と共同して、労働者を道徳上及び經濟上に高めることに盡力した。而して其奏効には運動が與つて大に力があつたのである。健康は労働者の資本である。運動は彼等の身體及び精神の緊張を容易にし、且短き時間に多くの仕事をするの力を與へるものであるとの、英國の醫者の主張は、正當である。英國人は教育ある者の權利及び義務として、運動の必要なることの知識を、人民全體に傳播すべきものと認めて居る。

日本では、労働時間と休息時間との區別が明かで無くて、日夜仕事を

するでもなく、遊ぶでも無い半ばの人が多いが、是はやはり英國の如く勉強する時には大に勉強し、遊ぶ時には總てを忘れて存分遊ぶといふ習慣を附けたいものである。

Work while you work,

Play while you play,

This is the way to be happy and gay;

This is the way to be happy and gay.

我が國人にも運動の必要が理解せられて、脛腰を伸ばして運動するやうにしたものである。

第八節 スポーツ

元來英語のスポーツ Sport といふ字は、狩獵の種々の種類、特に鳥打ち

及び漁獵に用ひられたのであるが、近世は其意味が擴まつて、熟練、耐久及び勝負の要素を多少含む總ての身體の運動を、スポーツの中に含め、人と人との競争、或は人と動物、或は人と天然との競争をも、スポーツといふやうになつた。故にスポーツといへば運動競技又遊戯をも含むのである。そこで十八世紀より十九世紀の半ばまでは、英國に於ては遊獵が一般に認められ、貴ばれ、ボールの競技は、クリケットの外、殆ど顧みられなんだ。今日は色々のスポーツが同じ位地に立ち、唯精神と身體上の熟練及び耐久を要するの程度に依つて、多少違つて居る。今日はスポーツにも各分業が發達してそれ／＼の専門家が出来るし、又素人にも種々のものをするよりは、一技に秀でることを期して居るのがある。故に力を貴ぶか、敏捷を重んずるか、或は長距離の競走か、短距離の競走かといふやうに、各人の體力、嗜好等に由つて選ぶところがあるのである。

る。随つて運動が専門的、職業的、輸贏的に傾く風がある。併し人民全體としては、尙クリケットでも、フットボールでも、何でもやる人が多い。是等は技に秀でるためでは無くて、運動其物の利益を認めるからである。

英國の運動家は其技を行ふに當り、種々の色の服を着て組を區別して居る。例へばフットボール俱樂部の數百は、各出来るだけ變つた色の組合せをして、競争に當り自他を區別することをするから、其色の組合せは實に様々である。

かやうに英國人はスポーツに熱心であるから、自然都會は勿論、全國到る處に多くの運動場を見るのである。英國を旅行する者は、到る處に綠の芝草の植はつた廣い運動場を見るであらう。英國の景色はボールが飛んで居らねば、決して完全なものでは無い。「英國は世界の最もしき土

地である。何となれば英國では年中通して野外に於て運動が出来るからである」とチャールス二世は言つた。チャールス二世は、王としては随分非難のあつた人で、中には英國の最も悪い王だとして居る人もあるが、併し其人民に非常に愛せられた所以は、野外に於て運動を好んだことが少からず其原因であつた。英人は十人寄れば運動場を拵へるといふ程である。今日日本でも英人(米人)の集つて居る所には大概運動場がある。横濱の如き神戸の如きさうである。英國の公園は、廣くて、平面的で、一面に芝草を植ゑて、運動に適するやうにしてあるが、又個人でも少しの場所があれば、ローンテニス場位は設けて居る。英國の都から郊外に出れば、打開けた所で、フットボールなり、ローンテニスなり、クリケットなりをやつて居るのを、到る處に見受けるであらう。彼等是一日の勞苦を運動で慰して居る。會社、工場から歸つての樂しみは運動である。

第九節 運動場

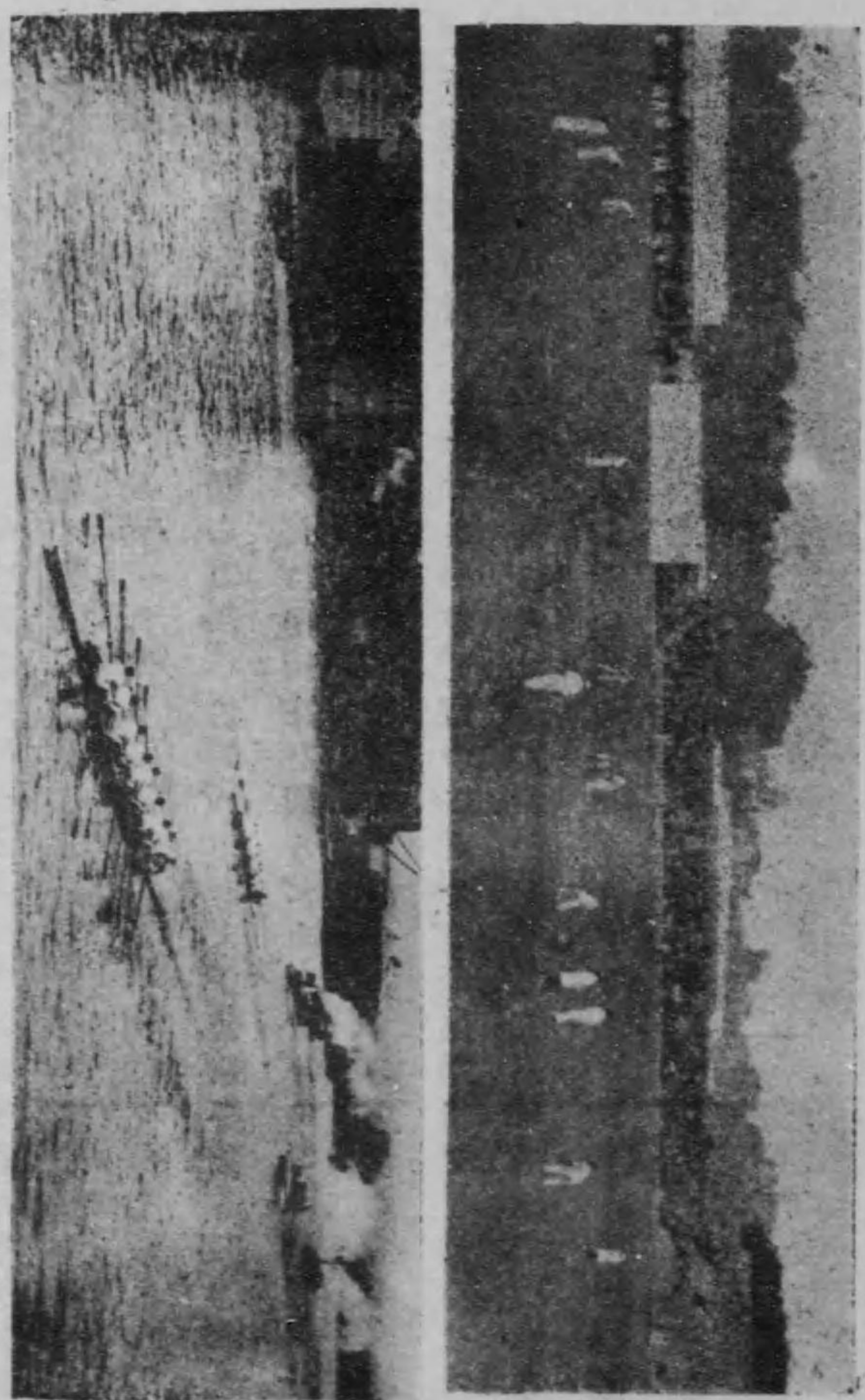
英國の市は平均五千人が一ヘクター(凡そ一町)の運動場を有することになるといふ。併し是は唯公共の運動場であつて、此外に私有に屬するものもある。又クリケットやフットボールの俱樂部は俱樂部専有の運動場を有するを例とする。而して其多くは勞働者の階級に屬する俱樂部で、勞働者は運動場の借入、保存の爲に醜金をし、主として運動の入場料に由つて之を支辨する。數十年前マンチェスター市は、其市の中央に横はれる場所を運動場とする爲に、四百萬圓を拂ふことを辭せなかつた。

英國の首府ロンドンは、非常に廣くて、人口の多いに拘らず、健康上には案外良い所で、公園及び運動場の設置には、非常に努めて居る。ロンドンには煤煙の酷い所で、氣候悪しく、天然には健康上極めて不利なる

市であるが、其割に死亡率は頗る少いのである。一八九三年の市の年報中に、市廳の土木課は斯う言つてゐる。ロンドンの公園及び公共の場所の有様は、甚だ満足すべきものである、運動及び身體の練習を奨励することは、我々の事業の最も愉快なるものの一である、前年に於てクリケットの運動場六千七百、フットボールの運動場千、並に子供に向つての多數の運動場を作つたり又は世話をした。又着物を着替へる爲に、料理屋等に立寄るの危険を防ぐため、種々の公園に心地よき着替室を建てて運動家の使用に供したと。ロンドンには三十年前既にこれだけの施設をしたのである。ロンドンに遊ぶ者の先づ眼に着くのは、お寺と運動場の多い事である。是は大人の運動場の外、甚だ多數の子供の遊び場が、市の行政の下に在るからである。其他私人又は俱樂部の運動場もあり、學校の運動場もある。それでロンドン或はその郊外を行く者は、人家の稠密

した中に、諸所に青々とした運動場の眼を悦ばすものがあつて、見物人が大勢居て、熱心に運動が行はれて居るのを屢見るであらう。英人は一體に平面の廣々とした場所を愛し、それに一面に芝草を植ゑて居る。彼等は新鮮で力の有る運動生活は、此芝草の上で發展し得るものと考へて居る。故に英國では斯かる公共の運動場には誰でも入ることが出来るので、運動仕次第、遊び次第である。併し多くの運動俱樂部は、自分の運動場を持つて居つて、運動者の休む所、見物人の棧敷、飲食物を賣るホールがあり、又出來事を時々報道するために、電話等の設備が出來て居る。運動場は非常に大きな球突臺の様で、少しの高低もない。英人は傳統的に芝草を愛し、大切にして、終始手入れをなし、又自働の撒水器で夏などは水をやつて居る。古い學校などには、數百年來の芝草の庭のある所がある。運動場の四方には、棧敷が斜にしつらはれ、入場料の外、

席料次第で好みな所に坐ることが出来る。其外の場所は立見である。ロンドンでクリケットの運動場の最も有名なのは、マリルボーン、クリケット倶楽部に属するローズ Lords と、サーレー地方の倶楽部に属する所謂オーバル Oval の二つである。ローズはロンドンの西方のレゼント、パークといふ公園の西に位し、上品な見物人の集まる所で、ケンブリッジとオクスフォード、特にイートンとハーローの中等學校が競技する時は、上流社會の者が澤山行く所で、又一の社交の場所となつて居る。その他カナダ人、アメリカ人、印度人、オーストラリア人等もやりに來ることがある。オーバルといふのは、ロンドン橋の南にあるケンニントン、オーバル Kennington Oval のことで、其周圍には人家が櫛比して居るが、中は廣い楕圓形の運動場で、殊にオーストラリア人と英人のクリケットの試合を始め、有名なるクリケットの試合が多く此處である。四月の下旬



スーペーホ大学大ヤツリメンク對パーオンスカ(下) トツケリカ校對學大國英(上)

から九月の上旬までに、四十回位の仕合があつて、豫め組も日も定まつて居る。ローヅは五ヘクタルの廣さを有し、オーバルは三ヘクタル餘の廣さを有する。

斯かる場合に運動を観るのは、昔のローマ人が競技を観るのとは違つて居るのである。ローマ人は唯競技を観るために行くので、競技が済めばそれぎりであるが、英人は唯競技者の巧妙を賞するのみならず、彼等より如何に運動すべきかを學び、歸つて自分等の運動場でこれを試みるのである。我が國では、觀る者は、學生が主であるが、英國ではあらゆる階級や職業の者、老人も若い者も、クリケットやフットボールを觀に行くのである。是から英國人の最も愛し、最も廣く行はれて居る運動に就て一つく話さうと思ふ。

第十節 クリケット

クリケット Cricket といふ運動は、日本では横濱か神戸の外餘り見るところは出来ぬが、先づベースボールに近いもので、唯其ベースが四つの代りに二つあるのが違ふ。さうして之をベースとは言はないで、ウィケット wicket といふ。

ウィケットには三本の棒が立つて居つて、其上に短い横木が二つ載せてある。其前に打手が脛當と手の甲當をして、權を短く切つたやうなバットを持つて立つて居る。其後ろに捕手が控へて居る、そこで向ふから投手が球を投げると、其球を打手が打つて、球が防禦軍の手に入つて、ウィケットの所に投げ返す間に、二つのウィケットの間を往復するのである。若し投手の投げた球が打てないで、ウィケットに當つて上の横木

が落ちたなら、打手はアウトである。だから上手な打手になると、一人で數十、多いときには百以上もウイケットの間を往復する。それで一人がいつまでもウイケットに立つことがある。故に勝負がナカク、長くて、大概十二時頃から始まり七時頃に終るが、二日も三日も掛ることがある。こゝがベースボールとは違ふ。野球はクリケットから變化して出来たものであつて、英國では餘りやらないやうである。

一體運動の季節は極つて居つて、クリケットは春から夏に掛けて行ひ、フットボールは九月頃から春に掛けて行ふものである。そしてクリケットは芝草の上でするし、フットボールは唯の地面でする。兩方の運動場は大概は別々になつて居る。

英國を夏に歩いて見ると、到る所に平な青々とした廣場で、青年や大人の群が、白か、又は筋の入つたフランネルの扮装で、堅い球を投げて

居るのを見るであらう。時々喝采の聲が起り、競技者は汗を流してゲームをやつて居る。即ち英國の風景は獨り草木のみならず、斯かる人民に由つて生きて居る。英國の風景は、ボールが飛ばねば完全でないとされて居るのは、その爲である。

クリケットの球は、ベースボールと同じく堅いから、之を取扱ふには勇氣と決心を要し、尙注意、敏捷、熟練が非常にいる。併しフットボールと違つて、時々立ち乍ら休む機會がある。随分強い、力の入る運動だが、老人も屢之を行ふ。例へばグレースといふ人は、元は醫者であつたが、一八六六年以來クリケット界に乗り出して、棒と球とを以て、最も勇悍なる働きを爲した人で、實にクリケット界の覇者であつた。それで醫者の方を廢めて、クリケット専門になつたから、ドクトル、グレースの代りに、ドクトル、クリケットと呼ばれて居た。クリケットをやる

者で、此人を知らぬ者はないが、五十歳位の時、尙英國に於ける最も傑出せる運動家の一人であつた。又アブソロムといふ人は、一八一七年に生まれたのであるが、八十近いまでクリケットをやつた。此人は土曜の午後店を早仕舞さして、ビジネスメンがクリケットを観ることの出来るやうにしたのを以て有名である。日本人で四十を出るとそろそろ老人株になつて、運動どころか、運動などは子供らしいと見向きせぬのとは類が違ふ。

クリケットの最も大切なゲームは、毎年種々の地方の俱樂部が其覇を争ふ時にあるのである。併し地方の俱樂部が皆此ゲームに與かるといふのではなくて、第一流に數へられるものの外は出来ぬ。此名譽ある俱樂部は、今日は十五ばかりある。其各俱樂部は他の俱樂部と二度づゝゲームをして、負けた方は落ちる。さうして最も成績の良い残つた二つの俱

樂部が、最後のゲームをするのである。マリルボーン、クリケット俱樂部 Marylebone C. C. は、斯界に於ける大審院で、其判決は最後のもので、また規則もこゝで極めたものが行はれる。此俱樂部は一七八七年以來、即ち百餘年來成立つて居るので、クリケットには非常な功勞あるものである。其總裁にはウエールス親王などがなられ、會長もクリケットの出来る貴族の第一流の者である。此等の俱樂部の競技のみならず、地方の重立つた俱樂部や學校は、其腕を示さんが爲に、殆んど毎年ロンドンへ出掛けて、オーバルやローズでゲームをする。又マリルボーン俱樂部は運動家を地方に自費で送り出して、地方の運動家を試めし、同時に見物人に運動の模範を示すことをして居る。

今如何に英吉利人がクリケットを愛するか、又佛蘭西人が如何に之を評價するかについて、面白い新聞の投書を紹介しよう。

第十一節 佛國人のクリケット評

ロンドンの新聞に、或るフランス人がクリケットを観るの記と題して斯ふいふことを寄せて居る——巴里を出る前に、或る獨逸人が、君は運動好きだから、イギリスに行くなら、あの面白いクリケットを見なくてはならぬと勧めた。自分は劍術も、乗馬も、自轉車も、自働車もやるが、まだクリケットの経験はないから、どんなものであらうかといふ深い興味が、見ぬ先から起つた。併し聞く所によると、クリケットは佛國にもあつたクロツス *Crosse* 又はボーム *Paume* のやうなもので、一の場所から他の場所へ球を投げるのである。斯かる遊戯は佛國に於ける我々には、大革命以來は子供らしいものとされて居るのである。扱て倫敦に着いて、其新聞を見ると、驚いたのは其紙面の最も大事な場所が、クリケットの

記事で満たされて居ることである。ゲームの長い詳しい記事が載せられ其チャンピオンは勇者である。クリケットは専門の新聞を持つて居る。併し一層自分の驚いたのは、二三日前、クリケットを観に行かうか、行くまいかと考へて居つた時に、新婚の若い夫婦が、自分のホテルにやつて來た時である。自分は彼等に注目して居たし、又食卓も共にした。ところが不意に若い夫が若い妻の方に身を寄せた。何を言ふかと傾聽して居ると、夫の聲は高くはないが、自分に響いた一つの言葉は「クリケット」といふことであつた。三日間食事の時いつでも若い夫は、妻に唯クリケットの話ばかりして居る。そして晝飯が済むと、彼れは其最愛の妻の傍を去つて、ゲームを観にか何時も出て行つた。昨日は自分の好奇心が沸騰點に達して、獸の跡をつけるインヂアンの如く、自分は此不思議なる若い婿さんの跡に附いて行つた。彼れはケンニントン、オーバルの

門まで来た。自分も彼れに續いて一シリングの木戸錢をはづんで門を潜つた。さうしてクリケットなるものを觀た。さうして自分は其受けた影響から尙未だ回復せぬのである。先づ門を入ると、入口の左側には、食料を供給する所があるし、右側には書いたり、電信を出したりする設備が、残らず届行いて居るし、其傍には新聞が山のやうに積んである。自分は歩を運動場の方に向けたが、何たる音も聞へぬ。恐らく誰も居らぬのであらう。不思議な若い夫は自分を欺したのではあるまいか。併し不意に自分の發見したのは、廣い芝草の圍りに大勢の人間が集つて、或は腰を掛け、或は立つて、クリケットといふものを見て居ることである。加之近所の屋根にも人間が居る。全體を積つたなら、少くも三萬人は居るであらう。それに婦人というては多くも二百人を出ない。これが第一良くない。女が興味を感じないで、行かぬよやな見物は見物ではない。

婦人は男子よりは眼の鋭いものである。若し婦人が斯かるゲームから常に遠ざかつて居るとすれば、クリケットなるものは、醜くて退屈なものでなくてはならぬ。醜くて退屈といふ言葉は、まだクリケットを評する強い言葉ではない。クリケットは絶對的に馬鹿氣イデオクたものである。自分は敢て讀者の怒を買ふ積りではないが、外國人であるから、案内記が英國の國技として書いて居るものに就ての自分の感想を言表はすの權利を、簡單に行使するのである。君等の國技といふものは、毫もクリケットではない、それは海である、クリケットは唯の流行物に過ぎない。自分がクリケットの法則を知らずに之を評するのは、盲目が色を評するに等しいといつてはいけない。本當の運動といふものは、それを觀る者には誰にも面白かるべき筈である。オーバルで自分が觀たのは何であるか。大きな芝草の真中に、シャツにフランネルのズボンを着た一ダース

位の人間が居つて、その中二三人は遠方に立ち、真中の數人の中には脛當をした者や、醫者の着けるやうな上着を着けた者が居る。脛當をした者は、佛國の昔のクロッスのやうに、向ふから投げる球を棒で打つた。全體の運動は或る規則に従つて手で球を投げ、棒で之を打ち返すことの絶えざる反復に過ぎない。是はやつて居る者には面白いが知らぬが、觀て居る者には雨の日のやうに退屈である。君等の三萬人はそれを觀るために行くのである。地方は地方と戦ひ、貴族もクリケットに於ける月桂冠を求め、君等は袋に晝飯を入れても、五六時間を見通すことを好んで居る。見物人は動きもせず、黙つて憂鬱に之を眺め、時々稱讚の聲を發するに過ぎぬ。此單調、此沈黙、此退屈も決して彼等を運動場から追拂はぬのである。それも競馬のやうに賭でもするならばまだ分るが、賭もせぬのに斯うとは誠に不思議である。

有體に言へば、君等は何をして居るかといふことについて考を勞せず、如何に時間を一層利用すべきかを知らぬのである。君等は如字的にあの青い芝原と、球を投げる一ダースの人とに由つて催眠術に掛けられて居る。數萬人のこの沈黙は、不自然なものである。斯かる沈黙を生ずるのは、クリケットなる運動は魔術の一種であつて、君等を擒にするものでなくてはならぬ。此運動は簡單で、子供の喜ぶものであるから、君等も小さい時やつたのだが、大きくなつても、やはり氣が子供らしく且元からのなじみであるから、年を取つても見捨てられぬのである。君等は此技に優れて居るから、君等の子供もさうでなくてはならぬ。それで君等は英國の名譽と其運命は、競技の結果に含まれて居ると、子供に言聞かすのである。何と面白い智慧の外れ方ではないか。何と面白い簡單さではないか。佛國に於ては、我々はもう昔のこと、斯かる子供らしい遊びは

止めた。成人は脳を使つて、進歩のために盡すべきであつて、乳管を唇に當てた時にする事は、口髯が生へた時にはせぬものである。君等がそれは間違つて居るといふなら、自分の返答は斯うである。佛蘭西の錠前鍛冶のミシヨアの御蔭で、君達は自轉車を持ち、それが君等を富ましたつあるではないか。又我々は君等に海底を如何に航行すべきかを示したから、今度は如何に空中を航行すべきかを君等に示すであらう。

以上は或佛人のクリケット評であるが、これが良く佛人の運動に對する觀念を表はして居る。此寄書があつた後に、英國の或讀者は次のやうな投書をした。

自分は文明的の仕方に於て、此佛人に運動の意味を説明せんことを試みるよりは、寧ろオーバルで一週間を消費することを望むものである。自分は簡単に次の事を問ふて、少し彼れを譯の分つた者にしようと思ふ。

彼れはウオータールーの勝利は、イートン學校のクリケットの運動場に基くものなりとの、ウエリントンのお話を聞いたことがあるかと。また他の投書家は斯う言つて居る。自分は斯かる寄書が紙面に載せられたことを驚く者である。彼れは彼れの國人が、巴里のコーヒー店にアブサント酒を飲みつゝ、往來を通行する各の女を評しながら、午後を費す方が、クリケットを見るよりも有用であると考へて居るのであるか。慈善市に於ける彼の恐るべき火事の時、居合せた男の中に、クリケットをやるものが居つたならば、彼等は婦人を先づ助けて、後から自ら出ようと考へるだけの勇氣と冷靜を有したであらうと、英人は評し返して居る。

英吉利人が黙つて運動するといふのは事實で、フットボールでもクリケットでも、爲る者は啞の如く魚の如く一言も發しないのである。濟まぬ顔をしてやつて居るのである。それでフロアツサーも彼等は國風に從

つて悲しさうに慰んで居た *Ils s'amusaient tristement, selon la coutume de leur pays.*
-Froissart と言つて居るが、これが英人の特色である。(尙英佛人の體育に
關する比較は、ハマーントンが「佛人と英人」といふ書の始めに面白く書
いて居る。P. G. Hamerton, French and English. A Comparison.)

第十二節 フットボール

クリケットと並んで、英人の最も愛する運動は、フットボール Football
である。クリケットは十八世紀以前に其源を溯ることはむづかしいが、
フットボールは甚だ古い國民的娛樂の道具である。併し中頃暫く殆ど忘
れられて居つたが、六十年來再び一般に行はれることとなつて、今はク
リケットと尠くも同じか、或はそれ以上に行はれて居る。フットボール
はクリケットと違ひ、絶えず身體を動かし盡力せねばならぬ。それで寒

い時候の野外運動としては適當である。クリケットでは風邪を引くこと
があるから、氣候の良い暖い時にやるのであるが、フットボールは氣候
の悪い時にやる。又運動家の着物は轉けたり、壓されたりするため、
泥だらけになるが、クリケットの服装は汚れないできれいである。併し
素人眼にはフットボールの方が一刻一刻に變化があつて面白い。フット
ボールは甚だ危険のやうに見えるが、統計に據ると危険は案外に少ない
のである。

フットボールには二通りある。一つはラグビー Rugby の中等學校がそ
の本元で、所謂ラグビー式のフットボールと呼ばれるので、これは或時
には手を使つても宜いのである。他の一つは手や腕を用ふることは一切
禁じられて居るので、アツソシエーション(組合)のフットボールと呼ば
れて居る。この「組合」といふのは、一八六三年に出來たもので、詳し

く言へば同年十二月八日から、この方のフットボールは始まつたのである。この組合は爾來その勢を増し、一八六八年には唯二十八の俱樂部が之に屬して居つたが、今は數百ある。

フットボールといへば、足で蹴るだけであるべきだが、足の外、頭も用ひられるので、時には頭と頭でボールの返し合ひとなつて、ヘッドボールとなることがある。此「組合」又はそれと關係のある組合に屬する俱樂部は、互にどれでもゲームに與かるを得るので、その成績の最も良い二つが、最後に残つて、ロンドンの南の水晶宮、即ちクリスタル、パレス Crystal-Palace に、所謂イングリッシュ、カップを争ふのである。このカップ(勝利の杯)は一八七一年—一八七二年の季節に始められたもので、フットボール界に於ける最も珍重されるトロフィーであつて、その争奪のために、各俱樂部は全力を盡して戦ふのである。それでこのカッ

プが英國の南部に取られると、北部の者が躍起となるし、北に取られると南の者が躍起となる。クリスタル、パレスに於ける最後のゲームの時は、大概八萬人位の見物がある。それで其前夜頃から遠方の市から臨時汽車が五六度も出るので、獨りイングランドのみならず、スコットランドの方からも来る。今如何に英國人がフットボールについて興味を有するかを例を擧げて示さう。一九〇六年南のトッテンハム、ホットスバー俱樂部が、北のセツフィールド聯合俱樂部を負かして、カップを北から南に、數年の後取返したゲームの時は、十二萬千八百十五人を見物人が、クリスタル、パレスにやつて來た。又スコットランドのグラスゴーは、フットボールの名所であつて、一九〇五年四月五日には、スコットランド對イングランドのゲームがあつた。其時も見物は八萬人ばかりあつたが、不幸にして棧敷が落ちて十六人殺され、二百五十人ばかり負

傷して、フットボールあつて此方の大椿事を惹起した。英國にはフットボールの職業團が多数あつて、イングリッシュユ、カップもそれらの間の争奪となるのである。恰も米國に於けるベースボールに匹敵するものである。さうして、ゲームがすんで、運動場を出ると、負け方に對して、Doleful memory として、吊詞を印刷したカードを門前に待ち構へて賣ることがある。つまり前以て兩方のを作つておいて、負けた方のを賣り出すのであらう。

フットボールに就て、佛人マクス、オーレルは、その著「ジョンブルとその郷島」の中に、次のやうに言つて居る。要するに英國の學校では、運動競技を過重視するやうに思ふ。自分は競馬の如く、試したり賭をされる人間の脚や二頭筋を嘆美する氣にはなれない。固より身體の能力の發達は喜ぶが、やはり馬の方が好い。ゲームスの多くは甚だ危険である。

特にフットボールは野蠻人に向く亂暴なゲームである。反對の方のゴールに蹴込むために、兩方に十五人の大男が押し合ひへし合ひ、轉がり合つて、肋や顎の骨を折る危険を冒して、息を切らし、着物を破り、肩を傷き、髪を逆立て、顔は汗まぶれ、血みどろ、泥だらけになつて、こゝを先途と争ふ様を想像して見るがいゝ。それでも「いゝ勝負ですね、あなた」"Fine game, sir."と、他のバブリックスクールでゲームに勝つた一人の頑丈な青年は、自分に言つた。スクールボイズの外の人々、即ち士官も紳士も、英國に於ける各の活動的な人は、これらの野蠻的なゲーム—フットボールをやる。フットボールとクリケットは、英國の二つの國技であり、英國が狂氣のやうになり、酔つたやうになるゲームスである。しかし随分よくある椿事に拘はらず、かやうな娯樂は、佛國人が「ナナ」(ゾラの小説)を讀んだり、校庭で—はるゝ屢、淫猥な會話をするよりはま

しである。

英吉利人が運動に對して如何なる興味熱心を有するかは、略以上の記述に由つて分るであらう。是には無論利益もあるが、不利益もあるであらう。英國の新聞には、往々英人が運動の爲めに時間を浪費することに就て苦言を呈して居る者もある。日本では運動を奨励しようと思つて、新聞に、雜誌に、實行に盡力して居る者があるかと思へば、英國では運動を制限しようと思つて居る者があるのは、國は様々と云はねばならぬ。併し願くは英國のやうに運動制限論が起る程に、我が邦に於ても運動が盛になつて欲しいものである。

英國での競技は往々職人的に流れて、唯金錢のため、生活のために競技をする者が出來て、競技が品位を失したといふやうなこともある。しかしそれは米國ほゞではない。我が邦に於ては競技は何處までも競技で

あつて、それ以外の附加物の爲めに墮落しないことを希望する。

第十三節 ゴルフ

ゴルフ Golf も英國で行はれる運動である。今日は追々廣まつて、アメリカ、オーストラリアにも及び、我が國にも少しはする人も出來た。しかし費用のかゝるもので、金のある人でないとできないから、自ら行ふ人が限られる譯である。ゴルフは元來スコットランドの運動であるが、英人もよくやるのである。此技に要するものは距離の正確なる目測、手及び腕の熟練、打つ力と距離との釣合を取ることである。運動も中庸であるから、年を取つた人にも出來る。婦人も多くする。其行ふ場所は野外で、海濱や岡のある所などで、新鮮な空氣を吸ひながら出來るから、健康上甚だ良い。國會議員なども能く之を行ひ、懇親旁野外に出掛けて

やることもある。日本の懇親會は酒を飲む一方で、運動をして懇親を厚うするといふことは、樂にしたくもない。どうか狭苦るしい四疊半の座敷が、廣々とした運動場に地位を譲るやうにしたいものである。

第十四節 ローテニス

英人の愛する第四の競技は、ローテニス Lawn-tennis である。此競技は非常に技術の精練に達することの出来るもので、又少からず運動になる。英國の學校では、ローテニスはクリケットと兩立しないものとして割りに持囃されぬ。併し男女一緒に加はることが出来るから、社交上やる者も少くない。日本でも此頃は女學校にもテニスが行はれるやうになつたが、誠に宜いことで、尙益盛になることを望む。獨り學校のみならず、富裕な人は、その庭の一部分を割いて、ローテニス位やるが宜

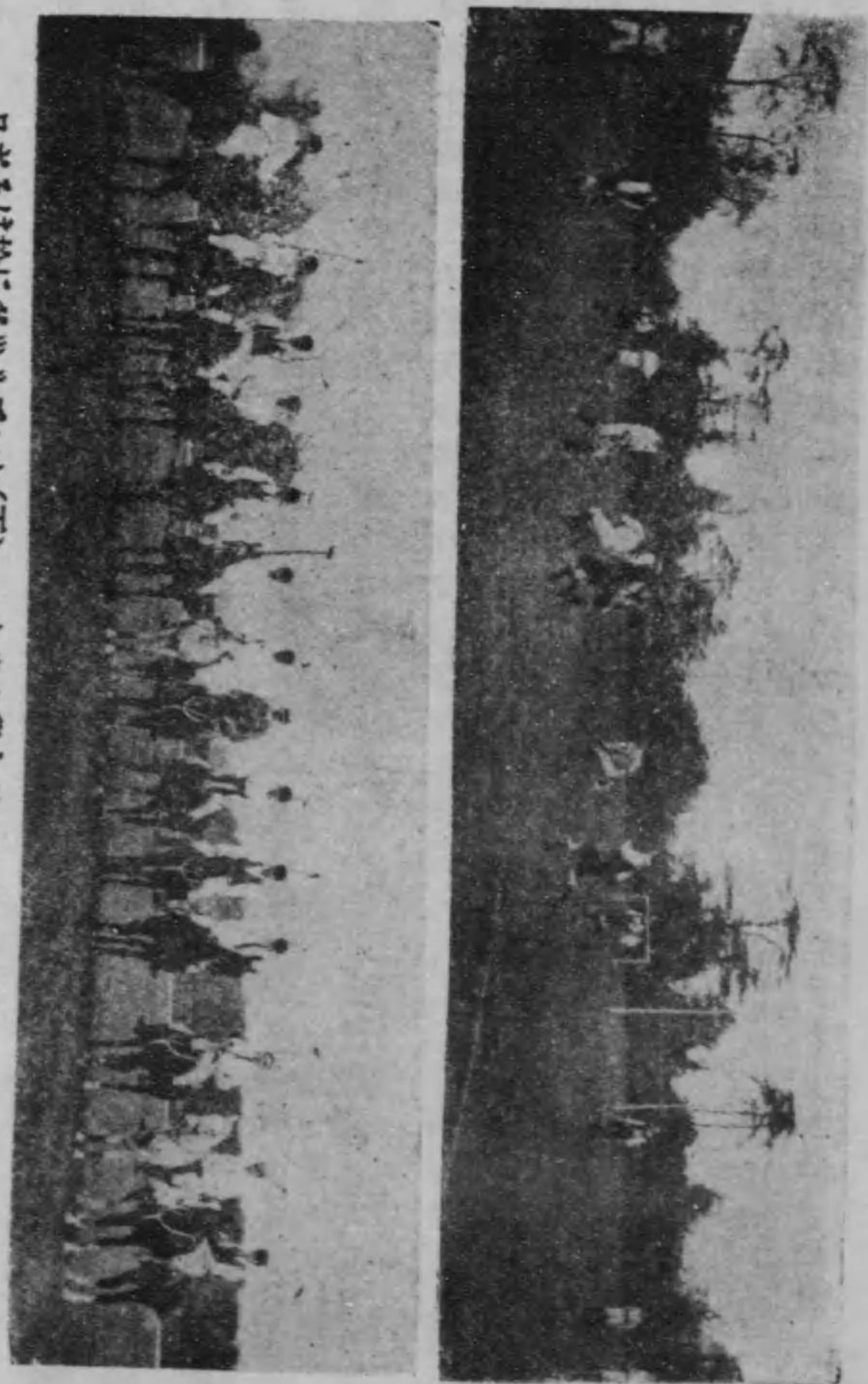
い。何にもせずと座敷に燻つて青い顔をして居るよりは、どの位氣が利いて居るか知れぬ。

ローテニスはフットボールのやうに古來の遊戲であつて、その起源は中世にある。併し今日のやうなローテニスは、一八七七年來のことである。此競技も獨り英國のみならず、佛、獨、米にも擴つて居る。英國ではロンドンの郊外の如き、多くのコートが列んで設けられ、夕暮などには、大勢の者がやつて居るのをよく見受けることである。古風のローテニスから新式のに移すに特功のあつた人は、ジュリアン、マーシヤル Julian Marshall といふ人である。一八八八年の春にローテニス組合なるものが成立して、爾來此組合が規則を定めて居る。今日ではデヴィス、カップなどもあつて、國際的に競技が盛であり、我が國もこれに參加して、優秀なる成績を示し、世界の注目を惹いたことは、皆よく知る

所である。このカップは千九百年米國の上院議員デヴィスといふ人が、英國と米國とのテニス競技に寄贈したものであるが、一九〇四年からは國際的に世界各國の選手がこれに参加し得ることとなつたのである。

英國ではこれらの運動の外、ファイブスFiveesといつて、三方に壁を立て、其中で球を壁に打當てて、其飛んで來るのを、直接に或は一飛びした處を、手か又は手に持てる小さい木かで、壁に打返して勝負を争ふ遊戯があつて、古いバブリック、スクールには、澤山其コートが設けてある。例へばイートンでは五十ばかりのコートがある。ファイブスには打ち手は同じ場所に留つて居らねばならぬ。

ホッケー Hockey は、日本では殆んぎやらぬが、英國では大學なごでも對校マツチもする。女子はフットボールをしない代りに、ホッケーをする。一寸フットボールに似たものであるが、違ふのは球が小さくて堅く



ロガるけ於にヤツリマツケ(下) ーケツホ學大ヤツリマツケ對ポーオスリオ(上)

て、足で蹴る代りに、腰より下程の長さの先の曲つた木の棒で、地面を這はして打つの違ひがある。これは冬季に氷迂りをしながら、行はれることもある。英國の女學校では随分行はれ、學校と學校とのマツチも時あるし、又カップの取遣りもする。今日はアメリカの方にも可なり弘まつて居る。是は婦人にも好い運動である。併し今日の所では、日本の女生徒には少し劇けし過ぎるかも知れぬ。其外ラクロス Lacrosse、コロツケー Croquet、兵隊鬼ゴツコ、ボールス Bowls、コイツ Quoitsといふのも、多少行はれる。又ボロ Poloといふのもあつて、馬上で打球の競技をするのであるが、大學の學生なども時々する。

第十五節 ポートレース

英國の運動界で有名なるもの一つは、オクスフォード Oxford 對ケン

ブリッジ Cambridge 大學のポートレースである。他の競技はバブリック、スクールに始まつたのであるが、ポートレースは大學が元であつて、ポートは學科に匹敵すべきものである。是は春季に、耶蘇復活祭の二週間前の土曜日の午後に行はれるのを通例とする。コースはテムス河で、ロンドンの西なるバットネーからモートレークまで、距離は四哩四分一以上あつて、それを漕ぐ時間が二十分乃至二十三分である。是は風や潮の加減に因つて違ふのである。倫敦の住民は、此日には「ダービー」の競馬に於けるが如く、何萬となく見物に出掛けるので、ロンドンの西は、一定の方向に人の流れを作る。オクスフォードの色標は暗青色（ダーク、ブリュー）、ケンブリッジは淡青色（ライト、ブリュー）であるから見物人も最辰によつて、暗青又は淡青の釵のやうなものや、切れを付け、馬子や御者などは、其馬にもしるしを付けて居る。一體ポートレースに

限らず、フットボールでも各倶楽部の色標があるから、見物人は各最良の方の色物を附けて観に行くのである。

ボートレースのコースはバットネーの橋の所から、上流にハンマースミッスの橋を越えて、モートレークに達するのであるが、其間河流が曲つて居るから、初めから終りまでを見ることはできないで、唯其一部分しか見えないのである。それで当日は河岸の家は、多くは貸座敷となり、又諸所の波止場や浮臺も利用され、船をも浮べて、見物人を呼んで居る。通例は一人二シリング位である。高い方は限りがない。見物人も唯観るだけではなく、ボートを漕ぐ人が随分あるので、やはり此競漕は其模範となるのである。勝負が附くと決勝點の所に旗が揚がる。其色でどちらが勝つたといふことが分る。

このボートレースは一八五七年に始まり、毎年行はれるのが例であつ

て、本年(三月二十四日)が、その第七十五回のレースである。その中オクスフォードが四十回、ケンブリッジが三十四回勝つて居る。(一八七七年は同着)

レースの勝負は日本へも電報がくる。レースは多くは三月にあるが、四月のこともある。此レースのチャンピオンとなることは、非常の名譽であるから、其意氣込も亦非常で、練習には容易ならぬ苦心と努力を捧げるのである。それで新聞も練習の初から、常に詳しい記事を掲げ、漕手の體重身長から、右舷の重さが幾らで、左舷の重さが幾ら、どのあたりではどの位の速力で漕いで居つたといふことまで、二月頃から報道して居る。漕手の體格はいづれも立派なもので、大概漕手の平均身長は、六呎餘である。尤も舵手は軽い方が宜いから、身長もやゝ低い。しかし舵手を入れてさへ、平均が六呎以上になるのである。ボートレースの當

日又翌日の新聞は、其一頁を悉くレースの記事に當て、漕手の肖像を始め、コースの地圖をも入れて、詳しく記載説明して居る。

レースは土曜にあつて、濟むと夕刊新聞は報告を出すし、日曜は寄席等は休みであるから、月曜になると、寄席で其活動寫眞を見せて居る。

ボートレースの漕手はどうして選ばれるか。どんな練習をするかに就て少しく話さう。船を漕ぐことは年中通して出来るもので、雪でも、嵐でも、雨でも、晴でも、冬でも、夏でもボートは出て居つて、毎日コーチャーは漕手を指導する。漕手を選ぶ話をする前に、先づ大學のことを言ふ必要がある。

オクスフォード及びケンブリッジの大學は、前者は二十一、後者は十八のカレッジ Colleges、即ち専門學校より成るので、各カレッジは皆獨立に授業をやつて居る。ただ學位稱號を與ふることは、その統轄機關なる大學

がするのである。それでレースの漕手は、これらのカレッジの學生中から選抜されるのである。先づカレッジに這入ると、或る運動をしようと思ふ者は、其方の會に入會金を納めて、ボートならボート俱樂部に入るのである。多數の學生はボートを漕ぐので、中には一人でカノーを持つて居て、靜かに大學附近の流れを漕いで居る者もある。毎年カレッジの對校レースがあり、その成績如何が、大學に於ける知的地位のインデックスとせられる程である。レースのある間は、河の上下數マイルは大したホリデーの光景を呈する。「特に河はオクスフォードの生活の社會的方面とは生え抜きの關係がある。」 *The river is instinct with the social side of Oxford life.* sheldon.

ボート倶楽部に入つてから、學生がまだ漕艇の経験の無い者なら新しく始めるし、前に漕いだ経験のある者なら、それを続けるか又は習ひかへるのであるが、中にはイートンのやうな中等學校から、えらい者が來ることもある。操艇の初の練習は所謂タツピング *tubbing* といふので、是は一對の學生が、経験のある漕手に漕ぐことを習ふのである。各々の舉動が詳しく説明され、先づ腕の引き方伸し方が教へられ、一漕ぎぐが非常な注意を以てなされるのである。二三週間すると、物になるかならぬかの見分けが附く。それで望みのない者は、他の運動にかはることを勧められ、望のあるもの *wet boys* は、操練を続け、今度は四人で漕ぐ。其世話の行届くことは前の通りである。それで暫くやつて、今度は八人で漕がす。斯ういふ組が二つ三つ出来る。そこで秋季に此等の八人組が河に現はれる。これらの組の中から、各カレッジを代表するものが出來て、

これが大學の内輪、即ちカレッジとカレッジの競漕に、先づ與かるのである。これらのレースは、オクスフォードでは、トリーブズ *Trips* と呼ばれ、ケンブリッジではレントツ *Leints* と呼ばれる。是が濟むと、兩大學對抗のボートレースの用意が始まる。此レースは、代表選手組の一つぎりて、二流以下の選手の競漕はせぬから、三十分もかゝらぬ中に濟んでしまふ。此レースに與かる八人組を、オクスフォードではエーツ *Eights* といひ、ケンブリッジではメース *Mays* と名けて居る。即ち選手である。其練習は一層厳しいので、漕手中の一番良い者が残る。是はカレッジからの一粒選りである。

十月に學年が始まると、ボート倶楽部の會長が、本選手の空位を充すべき候補者に就て考へ出す。それで各カレッジのキャプテンが、その選に與かりたいと考へる漕手の人名簿を提出する。會長は是等の候補者を或

る日呼んで、其漕ぎ工合を見るのである。其中から試しの八人組 *Eight* と名けらるゝ二つの漕手の組が作り出され、此等の中から本選手の空位が補はれるのである。

トライアル、エーツの競漕がある前、二週間位彼等は嚴格なる練習をする。十二月の初の土曜に此等のエーツが出逢うて、オクスフォードの漕手は、モールスフォードの流れで、ケンブリッジの漕手は、イリーリーの所のアデレードの流れで競漕をする。此等の競漕が済むと、各カレッジから六人乃至八人位の漕手が、最後の相談に乗るべき人として選り出される。斯うする内にクリスマスが来る。

第十七節 本選手の練習とレース

新年の學期の初に又練習が始められ、今度は唯一つのボートが出掛け

る。一二人の故參の選手が漕手の中に混つて、他の席は試験中の漕手が占めるのである。彼等は毎日色々な位置で漕がされる。此間彼等は鋭い眼で常に注視されて居るので、各漕手の正確なる力量が決定されるのは長くは掛らぬ。今度は本物になるので前の本選手がそれ〴〵の位置を占め、ボートは本競漕に出る用意をする。斯んな工合であるから選り出されて最後に残るのは、空席を占むる者と、豫備の二人位の者である。

此等の漕手で出来た組が大學のボートに乗つて水上に浮ぶ。岸には熱心なる群集が常に之を追うて評價して居る。ボートは非常な速力で水上を迂り、櫂を水に入れる時の外は殆ど微動だもないやうに能く揃ふ。これが漕ぐ時には、他の練習ボートは皆コースを譲らねばならぬので、それに障礙を與へたカレッジのボートには、大した罰金が附くのである。

斯る程に二月となつて、漕手は軽い競漕用の船に乗換へる。さうなる

と略、選手は極るのであるが、まだ安心は出来ない。色々な組變へが試みられるので、其結果が注意して研究される。先づ完全な平均が必要であるから、漕手はボートの前の席から後ろの席に、左舷から右舷に色々漕いて見て、八人が個人的に又一緒に最も都合の好いやうな位置に排列される。毎年の漕手は二人と變ることは少い。舵手の如きは選り抜いた者であるから殆ど變らない。舵手の資格は身體が軽く、度胸があつて、判断の良いといふことが第一の資格である。ケンプリツヂの漕手は、通例イーリーElyで、三四週間漕ぐ。こゝは水がカムよりは深くて能く流れて居るし、又カレヂの多数のボートのために、邪魔をされることがない。カムCannといふのはケンプリツヂの横を流れて居る小川で、こゝではカレヂのボートを始終漕いで居るから、練習には都合が好くない。レースのある四十日位前から、漕手は本競漕の最後の練習をし始める。

各々の漕手は次の六週間練習に耐へ得るや否やに就て、先づ醫師の診察を受ける。此練習は非常に骨の折れるもので、朝から晩までやらねばならぬ。

本レースの前三四週間頃に、漕手連は大學所在地の河を去つて、テムス河に船を浮べる。ボートは能く包まれて、テムス河に送り附けられる。斯んなことで一週間ばかり掛る。其間漕手は有志の家に御客となるを通例とする。ボートは毎年新しく造るので、それが試されるし、船も新しいのが出来て、一人くゝの好み、便利に従つて試用される。漕手がパットネーに来るのは、レースの始まる前二週間頃で、此時はもう最も厳しい練習は大概済だ頃である。彼等是最良の有様に居るので、之がレースの日まで持耐へられねばならぬ。其中の一人でも力を消耗するやうなことをし、又は練習を怠ると、勝利の見込はないのである。是まで

のレースに依つても、勝敗は僅か一時位で附くことが珍しくない。

バットネーにある頃は最も大事な時であつて、倫敦の漕手と、時に競漕を試み、又スタートの練習に多くの時を掛ける。漕ぐ者は八人であるが、豫備に今一人が附けられて居る。勝つた方の漕手は、毎年各そのレースに使つた權を、舵手は舵を戰捷記念品として貰ふことが出来る。

是が先づボートレースの練習の概略である。漕艇は僅か二十分位のものであるが、之が爲めに如何に多くの人と時間と勞力が犠牲に供せらるるかを見たら、英吉利人が之に重きを置き、又學生が之を名譽とするの無理ならぬことが分るであらう。ボートレースはカレッジメンの特色、氣風を次ぎ次ぎのゼネレーションに傳へるところの健全なる競技である。

英國のボートレースの白眉はこれであるが、その外に色々有名なボートレースがある。例へば六月の末か七月の初に於けるヘンレー、レガタ

Henley Regatta と云はるムテムス河のヘンレーに於けるボートレースを首め、マロー、ステーンズ、ワルトン等で、毎年レースがある。いづれも都鄙の者が男女老弱を問はず澤山出掛けて遊ぶ社交的のもので、無数のボートが集まる。ヘンレーには、オクスフォード、ケンブリッジ、ダブリン大學を始め、イートン倫敦漕艇俱樂部、レアングー俱樂部、テムス俱樂部其他の俱樂部が行つて競漕する。アメリカ大學の漕手も時にはやつて来る。其外帆船即ちヨットのレース Yacht-race も、夏にはテムスの河口で催ふされる。又アメリカとのヨットレースもあつて、例へばサー、リプトンといふ有名な茶商人は、アメリカのヨットと競争し、カップの取遣りの爲に、毎年のやうにヨットをアメリカに出したことがある。アメリカまで態々大金を遣うて競争しに行くなどは、馬鹿氣て居るやうであるが、其中に色々船の改良もされ、第一其氣性が面白い。ア

メリカ方もカッブをデフエンドする爲に、一回のレースに百萬圓以上を費すことがある。

英國の今日あるを致したのは、要するに海の御蔭である。英人は生れながら水を好み、船を好み、エマーソンの所謂海に行く性質 *sea-going quality* を持つて居るのである。ヂブデン (Charles Dibdin, 1745—1814) の如き、船歌の作者としてユニツクの人も居る。

第十八節 游泳

英國では、ボートのみならず、游泳も盛に行はれるので、夏季になると諸方に游泳場が設けられ、われ一にと泳ぎに行く。ロンドンだけでも數萬の小學校の生徒が、游泳を習ひに行く。游泳は獨り男子のみならず、婦人も随分する。其代りには夏になると、新聞に溺死の報告が非常に多

い。泳ぐ人が多いだけに溺れる人も多いのである。無謀な游泳はいけな
いが、いつまでも水を恐れて、海に乗出すと、顔の色が海のやうになる
やうでは、到底海國の人民とは言へぬ。幸に近頃は、諸處に游泳場が出
来て、學生が多く行くし、又長距離游泳もあるので、誠に結構であるが、
多くは學生か兵士で、其外の者は水に入るといへば、多くは湯に入るか
温泉に行くが山である。

英國で長距離游泳で最も有名なのはキャプテン、ウエブ *Captain Webb*
である。此人は四十六年前に、英國の海岸からドバー海峡を泳いでフラ
ンスの岸に着いた人であるが、其後北米のナイヤガラの急流を泳ぐこと
を企てて遂に溺死した。二年の後にカビル *Caville* といふ人がドバー海峡
を泳ぎ渡つた。三番目は一八九〇年で、アメリカの背泳の名人ダルトン
Dalton といふ人である。一九〇五年にはホルバイン *Holbein* といふ人が、

三度此海峡を泳ぎ渡ることを企てたが、潮流等のために成功しなかつた。併し三度目には水中に二十二時間半ばかり休みなしに居つて、二十三哩許を泳いだ。不幸にして英國の岸に届く一哩ばかりの所で潮流のために止めねばならぬこととなつた、しかし水中に長く居つたのはこの人が第一である。其用意を見ると、先づ全體に油を塗つて、眼には潮水を避けるために覆をして、水中では常に液體の滋養物を瓶に入れたのを、船から投げて之を取つて居つたらしい。日本でも此頃は大分遠距離の游泳をやるやうになつたが、一つ水上マラソンでもやつて見たらどうだらう。

我が國でも男子の學校は勿論、女子の學校でも、海岸又は河岸近くにあるものは、宜しく游泳を奨励すべく、又水道等の便利のある所では、校内にセメントなり木なりの池を造つて、一方を淺く、一方を深くして其中で女生徒でも泳がしたらどうかと思ふ。斯んなものは、西洋では諸

方にある。夏なごは風呂を焚く代りに、此中に入れて泳げば宜い。女の身體は脂肪に富んで居るので、男子よりは比重が軽いから、浮くのは易い。論より證據、やつて見るが宜い。

第十九節 世界の觀光

英國人は水を恐れぬ。それで何處にでも出掛ける。例へばトーマス、クックといふ大きな旅行會社を始め、種々の會社が、夏季には諾威の北に夜中の太陽を見に出掛ける船を仕立てて出すとか、或はアフリカ、オーストラリア、印度へ健康の爲に、娛樂の爲に、遊獵の爲に船を出すと、春にはゼルサレムや、イタリア、エジプトの方に船を出すとかいふやうに、同勢を募つて世界を股に掛けて慰んで居る。我國も濠洲とか米國とか大きいことは先づ言はぬにしても、夏には北海道、樺太、朝鮮、

臺灣、支那の海岸位には、見物船でも仕立て、大勢行くやうなことにしたいものである。島國的根性といふのも、畢竟國內でぐづ附いて居るので、世界の廣さが分らぬから起ることであるから、成るべく諸方に出かけて、眼界を廣くするやうにしたいものである。

陸上では亦廻遊旅行のための安い汽車の往復切符が出て、會社などが之を取扱つて、國內は勿論、國外に出掛ける。さうして航海でも旅行でも婦人が澤山混つて居る。我が國でも、男子が成るべく婦人同伴で、海外の觀光にも出かけるやうにしたいものである。

第二十節 陸上運動

英國の陸上運動で名高いものの一つは、オクスフォードとケンブリッジの試合であらう。オクスフォードとケンブリッジは、何でも運動上に

競争するのであるが、此陸上運動も水上のボートレースと相列んで名物となつて居る。競技の種類は百ヤード、四分の一哩、一哩、三哩、高飛、幅飛、障礙物競走、砲丸投、槌投等である。二志以上の入場料を取り、棧敷は又別に取る。自分の見たのは、ロンドンのクイーンズ、クラブの運動場に於てであつた。もう五十回以上にもなつて居よう。プログラム印刷物を見ると、各競技の始まる時間が記してあつて、其通りに進行する。又運動場の圖があつて、各々の技を行ふ場所が書いてあり、一八六四年來、毎年各の競技に於けるチャンピオンの名と成績とを擧げた表が附いて居る。

日本でまだ餘りやらぬのは、徒歩競争ウォーキングレースである。この徒歩競争といふのは駆けるのでなく歩くのであつて、なかなか骨の折れる、體力の長續きを要するものである。徒歩競争はオリンピックク、ゲームスの中にもあつ

て、一九二〇年アントワープでは、三千と一萬メートル共に、イタリヤ人フリゼリオの勝に歸した。オリンピック、ゲームスの外、英國に於て萬國素人運動競技の會も催されることがあつて、各國から參集し、世界のレコードを破ることもある。

この外世界的運動競技には、一方オクスフォード、ケンブリッジ、他方米國のハーバード、エールとの陸上運動、ロンドン對ニューヨークの素人の運動競技等があつて、其記録も詳しく出て居る。

尙この外小さい運動競技の會は幾つもあるし、學校の運動會は中等學校、小學校、男女の學校色々ある。女學校に於ても運動競技は年中行事に入るもので、學校に於ける出來事 *events* となつて居る。大抵の學校には對校マッチ等で得たカップなど、トロフィーが飾つてある立派な一室を有して居り、毎年出る學校の一覽には、その終りに運動競技に關する

前年の成績が、百ヤード競走第一着ミス某、時間何秒。百ヤード競泳云々といふやうにその種目、時間、人名を舉げて出て居る。以て如何に女學校でも運動競技に重きを置いて居るかが分るであらう。小學校の運動會などでは、運動場にブランコ其他の遊技の道具を新設して自由に使はして居るものもある。大概運動は校内でなくて、設備の整つた運動場に出掛けるやうである。例へばローズ、スタンフォードブリッジの如きこれであるが、其外ロンドンの郊外の廣い原でやることもあり、そんな場合には、見世物や色々な店が出る。

英國にも體操學校及び體育場が數多あつて、それぞれ、體育や運動をやつて居るのはいふまでもない。以前には有名なる大力家サントウ *Santow* も體操學校をロンドンとクリスタルパレスに一つづつ持つて居て、體操といふよりは、寧ろ腕力又は體力の養成を主としてやつて居た。例

へば人々相當な重さの鐵のダンベルを持つて長い間運動する如きである。サンドウは唯強いばかりでなく、立派な體育家で、音樂の趣味も持つて居たし、色々な方面に興味のある人間であつた。英國には一般の體育運動の雜誌の外、婦人だけのもの、又クリケットなら、クリケットだけの専門の運動雜誌が種々あつて、雜誌店を賑はして居る。又體育運動に関する叢書もある。

先づこれが英國の人民がやつて居る運動の概況である。スペンサーの云ふやうに、人は立派な人間となるのには、先づ立派な動物とならねばならぬ。體力が弱くて、持續力、勇氣、敏捷を缺いた人間は物の役に立たぬ。英國人は國民一般に運動を好んでするから、役に立つ身體をもつて居る。それ故これに少し軍隊的訓練を施せば、短日月にして立派な兵士とすることが出来る。この事はこの度の歐洲大戰に於ても事實上證明

された事であり、以前は義務の兵役はなかつた程である。我が國でも今後軍備縮少の結果、兵役の年限も短く、兵士の數も少くなつたから、それを補足して、強壯精銳なる軍備上の實力を維持しようとするには、英國の如く、國民に體育運動を奨励し、その普及を圖ることが緊要である。ローマの歴史家タシタスに據れば、昔の或獨逸人は「諸神は最強者に味方す」*The gods are on the side of the strongest.*と信じて居つたが、此語はナポレオンが識らずして用ひて居る、即ち彼は「攝理は常に最も重き砲兵に味方せり」*Providence always favours the heaviest battalion*と言つた。彼等の兵學は前列の重さが、敵の前列よりも大であれば、敵は負かされるといふのである。ウエリントンがスペインに軍を進める時に、各々の兵隊を先づ武装した儘測り、次にそれを除けて測つたと云ふのは、軍隊の力は大砲の外、個々の兵士の重さ及び力に依るものと信じたからである。これ

は獨り軍事に於てのみならず、日常の事業に於てもさうであつて、吹けば飛ぶやうな身體でなく、體力充實し、元氣旺盛せる人が、國民が、最後の勝利者であるのはいふまでもない事である。

第二十一節 名士と運動

日本では運動する人といへば、學生か軍人か、以前それであつた少數の人に殆んど限られて居るが、英國では殆んどすべての國民が運動界の人と見て差支ない。男も女も、年寄も若者も皆それ／＼運動する。運動といふものは義務で出来るものではない、面白くてするのである。其運動が面白くなるまでに日本でも國民がならねばならぬ。中には運動と仕事とは兩立せず、頭を使ふ者は身體を使はぬ者のやうに思ふ者もあるが大間違ひ。英國には名士に運動家が少くない。其二三の例を擧ぐれば、

政治家グラッドストーンは、木を倒すことが上手で、其人望の助けとなり、詩人ウォーズワースは健脚家で、晴雨に拘らず毎日散歩し、自分は天氣と相談した事がないから、醫者と相談した事がないと云つて居た。小説家スコットは鋭敏なる狩獵家、バイロンは泳ぎの名人、シエレーはボートが好きで、遂に溺死した。理學家のチンダルは登山家で、アルプスの氷河の研究もした。畫家ミレーズは松鷄獵を好み、政治家ジョン、ブライイトは鱒釣りを好んでした。それが壯年ばかりでなく、經濟學者フオーセットは、盲目となつた後も、乗馬、氷江りを望み、文學者トロロープは老年で身體重く、眼も殆んど見えぬやうになつても尙甚だ狐狩りを好み、政治家バルマー-tonは老年、殆んど死に近いまでも狩獵し、ダービーの競馬には乗馬で觀に行つた。鞍に上るのは少しは困難であつたが、乗つたら最後慥かなものであつた。哲學者スペンサーは其著「第一

原理」をボートをやつては書き、其「心理學」の最も精微なる部分をゲームの隙にラケット(一種の遊技)のコートで書いた。彼れはまたテニスも釣りが好きであり、室内の遊びでは玉突きをやつた。外交家グレイならば、恐らく運動の趣味を有たぬ名士を擧げる方が早道であらう。若い時からよく運動する人は、年を取つても腰も曲らず元氣である。日本でも是からは名士にも運動は附き物位にしたい。名士ならぬものも無論である。日本では運動といへば利權運動で、運動場は待合の四疊半だ。こんな事で、キビくした仕事が出来ると譯はないではないか。

第二十二節 勇氣

英國人は勇氣に富んで居り、卑怯な事は嫌ひである。それは餘程この

國民の運動氣質から來て居ると思ふ。英人のする運動は、力一ぱい出して、負けるか勝つかハッキリせねば承知しない。そして中々頑固で負け嫌ひである。しかし勝つたとて喜んだやうな顔もせず、不相變まじめである。勇氣や膽力は自然に出るものではない、修養がある。その修養は運動に由るが、又敢爲の冒險にも由るのである。例へば印度に虎狩りに行つたり、アフリカに獅子狩をしたり、或は高山に氷河を跋涉したりする。一般の人民ばかりではなく、貴族、皇族にもそれをする人がある。皇太子も印度に行かれると、大抵虎狩をされる事になつて居る。従つて又奇禍に罹ることもある。何處の山で誰が行衛不明となつたとか、誰が虎に肩先を噛まれたとか、誰が水に溺れたとかいふやうな記事が、新聞にもよく出て居る。同じ死ぬるのでも、猫入らずを飲んで死ぬのとは、大分性質が違ふ。アドベンチユアは言はば一種の武者修業で、若い時

に之をやつて、度胸が据つて、それから政界なら政界に乗り出すから、何んな事があつても冷靜に、ビクともせず仕事をする。かゝる事の爲に誤つて命を失へば、その人の不幸で氣の毒であるが、それを恐れて居たならば、今日の英國は見られなかつたかも知れない。固より登山、探險等には念には念を入れて十分慎重に準備し、實行すべきはいふまでもない。しかしそれを恐れて仕ないのは衝突を恐れて汽車に乗らないやうなものである。日本でも封建時代には書生は刀を挿して、随分冒險もやり、又少年結社などがあつて種々の膽力の修練をやつたものであるが、今の學生には、それに代るべき練膽の法がない。ハイカラの蒼白いしやなくしたやうな者ばかり多くなつては、いくら本を讀んだつて、駄目である。我が國にも海に山に大にこの敢爲の精神と體力とを養ひたいものである。因に日本中部の高山、飛彈、信濃、越中境の山々、即ち立山、

槍ヶ岳、白馬山等に日本アルプスの名稱を與へたのは、英人チェンバレン(四十年程前のこと)である。英人は日本に來ても直ぐ山に登つたり、川を下つたりしたが、英人には運動はもはや一種の本能のやうになつたのであらう。元來アルプス Alps といふのは、高い連山の意義(語原はケルトの *al* 又 *al* より來たものならんといふ)である。それ故アルプスは南部歐洲に限らず、スカンヂナビア、北米、アビシニア等のアルプスもあるのである。

第四章 フランスの國民性と運動競技

第一節 フランス人の氣質

フランス人はラテン民族であつて、その特質を具へて居る。即ち氣輕で、陽氣で、熱情的で感激性に富んで居る。快辯で人づき合ひが好く、談話がすきで、社交を愛する。感情が強いから偏し易く冷熱の變化が多く、政治家でも人氣が變り易くて、内閣の更迭でも頻繁である。フランス人は古代ギリシヤ人と共に最も光榮グロリア、名譽を重んずる國民である。國歌「マルセイエーズ」には、「光榮の日は來れり」の句がある。名譽の爲には死も辭せない。侮辱はその堪へざる苦痛である。決闘はフランス人の花とさへ言はれて居る。愛國心が強く、一朝事有る時は、その熱情と相待つて、驚くべき事を遣りつける。しかし切尖は強いが、永くなると

飽いて鈍ぶる事もある。その邊は余程日本人と似た所がある。

フランス人は英雄崇拜者であつて、偉人が出ると極端に崇拜する。そのナポレオンの崇拜し方は、他國人には想像できないほどで、巴里に於けるその墓はすばらしく壯麗なものである。獨り軍人のみならず、文人も科學者も偉い人間は皆崇拜される。ビクトルユーゴー、バスマールの如き、これである。「マルセイエーズ」の作曲者リールも、國葬せられて、祖國の偉人 *les grands hommes de la patrie* の一人となつた。先頃亡くなつた女優サラー、ベルナルの如きも、佛人崇拜的であつた。人民が一般に劇的であるから、一時の人氣者に對しても、熱狂してこれを祭り上げる。拳闘家ジョルジュ、シャルパンチエーの如きも偶像化された者であるし一九二〇年オリンピックに於ける五千メートル競走の優勝者ギルモットに對する彼等の異常なる舉動（大群集の爲に胴揚げされつゝ場内を一周

した）の如き、よくこれを語るものである。

かやうに佛人は偉人崇拜家であるから、團集的仕事にも、リーダーを要するので、リードその人を得れば、彼等は驚異的の事をする。古くはナポレオン、近くはジョツフル將軍の如き、人氣あるリーダーは、軍隊を非常に強いものとする。しかし佛人は盲目的ではない。ドイツの兵卒は唯上官の命に従つて機械的に働くのであるが、フランスの兵卒は當面に於ける自己の地位を知り、目的を理解して働く。つまり、デモクラチックなのである。上官と兵卒とが互助的提携的である。佛人は自主自由なる英人と、獨斷服從的なる獨人との中間を行くものである。

フランスの親は子供を非常に愛し、その執着心が強い。女の子は勿論男の子でも、親はその行末を見届け、一生涯暮らせるまでの世話をし、準備をする。従つて親の負擔が大であるからさう澤山子を生む譯に行か

ない。先づ両親に二人の子供が止まり位である。それ故佛國は人口が殖えないで、却つて減る傾のあるのは、國としては心細い事である。その代りは國民の一人一人に手がかゝり、費用がかゝつて居るから、戦争などで、その一人を失ふことは、他國の一人よりも平均してその損失が大である。親が子に盡すことが多いだけ、それだけ親の干渉も強いので、子もよく親の命令指導に従順である。家庭で親にリードされた佛人は、社會に於てもリーダーを要求するのは自然であらう。

第二節 フランス人の教育と運動に對する態度

フランス人は教育に於ても最も多く手数のかけられる國民であり、且元來ラテン系の民族であるから、國語の性質上からも古典にも親しみ易く、古典的教養を受けるに都合が好い。従つてフランス人は最も多く人

道的教育を受けて居る。加ふるに歴史的にその文化は人道的色彩の豊かなものであるから、文化國民としては、恐らくフランス人は最も洗練されたものである。かやうな國民が、裸一貫の肉體を以て勝敗を争ふ運動競技を、野蠻的となし、子供らしいとして、一般に興味を有たないのは當然であらう。フランス人は心身の相關といふ事に餘り重きを置いて居らぬやうに見える。スペンサーが、有用な人間は先づ有用な動物であらねばならぬとの絶叫は、英國でも半世紀前には必要であつたのである。フランスの學校は、暗記主義、試験本位であつて、資格といふ事がやかましい。資格は試験をパスせねば得られない。この試験の各を通過する爲の教科書も凡そ定まつて居る位であつて、社會に出るまでには、種の試験の關門を潜らねばならぬ。即ち佛國の教育は知的偏重の著しいものである。それで英國では中學時代の生徒が、若いアスリートなる教

師の下に、運動場で、オープンエーアの中で、自由に活潑に心行くばかり運動して居る間に、フランスの生徒は、室内に閉籠つて書を読み、暗記せねばならぬ。加ふるに教師の監督は厳しく、註文はやかましい。即ち兩國の少年が往來を行くにも、前者は晴れやかな伸々した歩みを運ぶのに、後者には知的過重に頭を俯向けた、倔託さうな足取りを見る所以である。

大學生となると、一層運動競技とは縁遠いものとなる。彼等はかゝるものに興味を感じない。彼等の好むものは、都會の生活であり、社交であり、カツフェーであり、會話であり、文學である。婦人との交際は特にその好む所である。巴里の本郷區カルチエー、ラタンの學生 *students* は、婦人は愛するがスポーツは愛しない。とても新婦をホテルに置き去りにして、クリケットを見にゆくイギリスの新郎の眞似はできない。彼

等は英國の大學生よりは、遙かに多くの知識を有し、美術文學の趣味は有するが、スポーツには無頓着である。佛人が英人のクリケットを評したやうに、フランス人は、女が興味を感じないで行かぬやうなスポーツは、はすみがないから遣りもせず、見にも行かないのである。

フランスの婦人はホームの人である。一體フランス人にはフランスほど良い國はないので、地上のバラダイスである。従つて世界を股にかけて仕事をする事はその不得手である。植民地でも、餘り行かないから、發展しない。植民地に勤める官吏は、短い年月の中に本國に還つて来る。婦人に至つては特に外國に出るのが嫌ひで、又外國人の妻になる者も少い。フランスの本國にあつて、家庭を世界とし、妻となり、特に母となることが、その理想である。かゝる婦人が、又かゝる婦人に育てられ、かゝる婦人を相手とする男子が、スポーツに興味を覺えないのは當前で

あらう。

第三節 フランス人の運動競技

フランス人は肉體そのものだけの競技は、野蠻的又は原始的として好まない。運動にも知識が應用されなければいけない。文明の利器を使用する運動でなくてはいけないのである。即ち彼等の好む運動は自轉車や自働車の競走である。空中飛行の競争である。自轉車が佛人に由つて創造され、自働車や空中飛行が最も早く佛國で行はれ、その發達を促したのも偶然ではない。この方面では世界的優勝を獲る者が少くない。英人の運動は身體そのものの運動であつて機械を使はない。佛人は運動にまで機械を使つて、腦を悩まして居る。一體に基督教でも舊教の方は、肉體を誘惑の源として輕視する傾向がある事も、スポーツの發展には不利

益である。競馬はなか／＼盛んであるが、これは競馬そのものよりも賭けが興味を惹くからであらう。

フランス人はスポーツよりも體操をやる。學校でも體操を課し、都市には體育館が多く設けてあつて、そこへ體操をやりに行く者も少くない。軍隊の體操も盛んなものである。劍術 *Escrime* (*Fencing*) も随分行はれる。決闘によく劍を使ふもその爲である。ドイツ大學生の劍闘は技術の問題でなく、勇氣、耐忍力を養ふストイック的のものであるが、フランスの劍術は技術の巧拙を問ふので、日頃大に練習するのである。

テニスも行はれる方で、世界的競技にも参加し、相當の所まで漕ぎつける。特に昨年は女子の競技で、フランスの婦人が世界的選手權を獲た。角力にも強い者が居る。運動競技に於ても個人的には天才的な者を出すことはあるが、國民全體として寧ろ無關心の方である。

フランス人は一般に歐洲人としては身體が小さく、繊弱であつて、敏捷、巧妙、熟練を要する競技には適するが、大なる體力や腕力を要する「蠻的」競技には不適當である。彼等は感情が激し易く、克己自制に缺ける所がある。従つて競技に於ても英人の魚の如く沈黙で、忍耐持久、後ほご強くなると反對に、始めから喧噪であつて、極端に意氣軒昂し、又極端に勇氣沮喪する傾がある。それ故チーム、ワークには寧ろ不向きである。彼等は屢、大膽にして勇敢なる冒險的闘士であるが、一度敗北の兆が現はれると、崩潰して收拾すべからざるに至ることがある。丁度ウエリントンとナポレオンが、よく英佛兩國人の氣質を表はして居る。

フランスに於ては、都會の者は、頭が鋭くて皮肉で、知的には益、牙えて行くが、體格は良くない。しかし農夫は身體が頑丈で、底力があり、長途の歩行にも堪へる。かういふ人々の中から、運動競技に於ても個人

的に優秀なる者を出すのである。農夫は佛國のバックボーンといつてよからう。

フランスも歐洲大戰以後、國民の體育には一層力を用ひ、その普及發達に努めて居る。又オリンピック競技の成績は從來思はしくなかつたが（アントワープに於ける優勝は、ギルモット一人のみ）、これに屈せず熱心に練習して居る。且一九二四年のオリンピック大會は、首府巴里で行はれることであるから、一層熱心にやつて居る。それ故將來これらの効果は、相當に現はれることと思ふのである。

第五章 ドイツの國民性ニ運動競技

第一節 ドイツ人の氣質

ドイツ人は概して頑丈な大きな體格を有し、意志の力が強く、持續力に富んで居るが、野外に於ける自由なる運動競技は餘りその好む所でない、又長所でもない。一體ドイツ人は規律、統一、精確を好む民である。従つて組織力に富むが、各個人が任意的自發的行動を執つて、能く事を處理するといふのは得意でない。ドイツ人は上長の命令に服従し、多數が一齊に機械的動作をすることには長じて居る。家庭は勿論小學校、中等學校に於ても、訓練の第一義は服従又は従順といふ事である。これが規律が正しく、上官の命に従つて手足の如く動くところの精銳なるドイツの軍隊を現出せしめたのである。従つてドイツの軍隊には、命令する

所の優秀な將軍が必要である。彼等はリーダーでなければ、服従者であらねばならぬ。彼等が勝利を得つゝある間は、彼等は將軍を崇拜し、敗北すれば忽ちその人氣は落ち、或は之に背くのである。この度の歐洲大戰に於けるドイツの將軍の人氣の消長もよくこれを語るものである。これはカイゼルすらも免れる事ができなかつた。

かゝる特性を有する國民が、運動競技に適せないのはいふまでもない。所謂スポーツなるものは、一定の規則の下に、これに参加する個人の最も自由なる活動を要求するものである。臨機應變、機策縱横、飛び行くボールならボールを扱つて、最もその宜しきを得ねばならぬ。それには機敏、咄嗟の工夫、決斷、處理を要する、レソースフルでなくてはならぬ。どちらかといへば鈍重な、命令に由つて機械的組織的に動くを欲するドイツ人には、これは不向きである。運動競技でもキャプテンに服従

することはするけれども、そのプレーヤーの一人一人は各獨自の活動を最も自由に行ふのである。これは積極的であり、彼等は消極的である。

第二節 ドイツ人と體操

かやうな譯で、ドイツでは運動競技は榮えない。その代りに體操が盛んである。體操はドイツ人の氣質によく合ふものである。體操を組織的に學校生徒に行はしめた者はグーツムーツ Gutschmuths (1759—1839) で、一七八五年來の事である。次いでドイツ體操の父といはれるヤーン Jahn (1778—1852) が出で一八一〇年にベルリンで學校の男の兒を野外に引率して、體操遊技を行はしめ、これにツルネン Turnen (體操) と命名した。ヤーンは又種々の體操の器械を造り始めて、これを使用し、體操の種目をも殖やした。爾來體操の振興運動は漸次擴まつて來たが、學校との直接の



メーヤと館育體のクツネスメ

木馬、平行棒、梯、ブランコ等の體操器械を据え付け、又體操用具をも備へ、屋外には運動場があつて、皆熱心に運動して居る。幼年組、婦人組、老人組もあつて、それ／＼適當な運動をなし、老人は老人相當な運動をして居る。日中勤務する者は、日本でいへば寄席に行くやうに夕食後ツルンハルレに來て活潑に運動して居る。我が國でも都市には少くも寄席の數位は、體育館があるやうにしたい。ドイツ體操組合の會員はFの字を四つ圖にあるやうに合せたのを會員徽章として

關係はなくなつて青年が體操を行ふやうになつた。ヤーンは最初から強い愛國的動機から體操を行つたのである。(ヤーンはこの精神を以て一八一〇年に、有名な「ドイツ國民性」といふ書を公にした。)その間には政變があつて、政府に由つて體育組合は廢止され、ヤーンも禁錮された事もあつたが、一八六〇年來體育組合は政治と關係を絶つに至つて、體操は漸次隆盛に趣き、遂にドイツに於ては體操が、英國に於けるクリケットやフットボール、その他の競技の如き、地位を占むるに至つたのである。

ドイツでは體操が學校で行はれるのみならず、國民一般が體操に興味を有して居る。今日では體操組合 Turnvereineなるものが、全國到る處にあつて、男女老幼を問はず多數の國民がその會員となり、日々又は機會ある毎に體操をやつて居る。都市には諸所に體育館 Turnhalle の設けがあり、

居る。これは frisch, fromm, fählich, frei (新鮮、信心、喜悅、自由) の頭字を取つたものである。都會ではこの徽章を胸に附けたシャツに、ズボンをはいた少年をよく見受ける。これらの會員は日頃よく體操するは勿論、記念日その他の機會に、體操祭 Turnfest なるものを催し、都市に四方から數萬の會員が參集して、大體操會を行ひ、行進運動なごをする事がある。これは體育以外に、ドイツの國民的意識を強め、愛國的精神を養ひ、協同一致の風を生ずるに、與つて力あるものである。ドイツ人は體操を課業として行ふのでなく、好きで興味を以て、進んでやるのである。體操に由つて、身體の均齊の發達を遂ぐるは勿論、規律、沈着、勇敢、協同、健全なる服従心等を養ふ事も出来るので、體操がドイツ國民生活に與ふる影響は甚大である。

體操の外、ドイツ人は、フットボール、テニスなども可なり行ふが、

國民的といふほどではない。數年前ドイツの俘虜が習志野に居た時、往つて觀たことがあるが、その殆んど總てが、朝は冷水摩擦や冷水浴をなし、場内の周圍を何度となく徒歩する者もあり、ホットケーキ、フアウストバル (拳で球を打ち合ふ技)、テニス等を盛んにやつて居つて、實に元氣旺盛、血色よく、俘虜とは思はれなかつた。運動場もコートも彼等が造つたので、大きな石のローラーも備へてあつて、如何に運動に熱心であるかが見られたのである。その運動するや、少しも寒風にひるまず、熱心に、眞面目に、規律的に全力を振つて行ふのである。これも體操で訓練されたところがあるので、ドイツ人がドイツ體操を生み、ドイツ體操が又ドイツの國民性を陶冶するに如何に有力であるかを示すものである。

第三節 ドイツの學生生活

英國では運動競技は、バブリック、スクールや大學がその源で、學生がこれに多大の興味を有し、學校生活の要部を成すものであるが、ドイツに於ては、學生はスポーツには殆んど興味を有しない。英國では、大學の各カレッジが、各自のフットボール及びクリケットのグラウンドを有して居るが、ドイツの大學には運動場はないやうである。學生は運動場で競技なきをするよりも、室内の生活に興味を有する。それはビールを呑んで歌を唄つて遊ぶことである。ドイツの各大學には、學生の私の組合 (Körps 又は Verbindungen) が大概十幾つ位歴史的に出来て居て、各會館を有し、組合に加入せる學生は、常にこゝに集會して暮らす。先輩もやつて来て、こゝでドイツ學生の氣風も作られるのである。組合には各特有の赤、青、白等の色の帽子があつて、その組合の學生は、大學にもその帽子を冠つて出入して居る。一體ドイツ人はよくビールを飲む。ビ

ルを飲むと、生理的に一層渴を感じるのので、一種の病的現象だと、"Der Sport" の著者ヘッセンは言つて居るが兎に角よくビールを飲む。特に大學生は盛んに飲む。學生組合の會館などでも飲むので、それには儀式もある。従つて室内に在つて、情趣ある所謂ゲミュートリヒ Gemüthlich の生活を愛するから、野外で運動競技をすることは好まないのである。「學者は室内のものだ」"Der gebildete Mensch gehört in die Stube" とはよく其真相を語つたものである。ビールを多く飲むと脂肪が多くなつて、身體が重く心臓も脂肪で壓せられて息切れがし、無精なまになるから、運動競技なきには向かない。尤も百年來の體操と兵役とが、これを緩和して、多少身體を常態に復する傾はあるが、やはりドイツの上流は眼鏡を懸け腹部が肥滿し、ビールの影響を受けた心臓 *gerillt, fettsüchtig, und hierzig* の所有者たることを免れない。ドイツ人は力が強く、腕と肩との筋力が特に強い

が脚部の敏速を缺き、駢足の如きは不得手である。競技でも自然トラックよりもフィールドの技に適する。一體に規律に慣らされ、命令によく服従するから、團體的運動には優秀であるが、或る範圍に於て自由の行動の許された場合に最も強い英國の青年又は成人とは、その趣を異にする。ドイツ人には科學的精確や組織力はあるが、自發的臨機の行動に缺くる所があるから、スポーツマンとしては寧ろ貧弱なるを免れない。スポーツとビルとは、恐らく兩立するものであるまい。

その代りに、ドイツ人は室内遊技には強い。世界一流の撞球家にはドイツ人又はドイツ系の者が多い。撞球は科學的精確を要する室内遊技である。又バスケット、ボールも強い。比較的個々的なクリケットやベースボールを喜ばないで、一層團集的結束的のチーム、ワークを要するフットボールを好むもその爲であらう。

第四節 メンズール

ドイツの學生生活に於て、運動競技の方面と多少關係あるものはメンズール即ち劍闘である。ドイツの決闘は有名なものとなつて居るが、學生のメンズールなるものは、意趣遺憾があつてするのではない。意志を強固にし、膽力を練り、尙武の精神を養ふ爲に、一つの組合の學生が他の組合の學生などを行ふものである。然らば學生のメンズールはスポーツかといふにさうではない。對手の身體を劍で傷けて流血を見る如きはスポーツなるものではない。一種の擊劍で、スポーツ的のところもあるが、メンズールはメンズールで特有のものである。學生の劍闘は既に十六世紀頃からあるので、随分古いものである。大學でも、ゲツチンゲン、ハイデルベルグ、ボン、エーナ等の地方の、古い大學の學生間に重に行

はれたものである。大學出身の名士には、學生時代のメンズールの傷眼を、顔面に残してゐる者がある。政治家ビスマルクの左の頬の傷眼や、哲學者クノー、フィッシャーの鼻が多少變になつてゐたのは、その名残りである。

メンズール die Messur とは、元來尺度の意味で、測量した面積即ち劍闘の場所ゾラウシから來た學生語であつて、劍闘に當る語は Fechten 又は Liebfechten である。他から侮辱されたとか、意恨の爲にするものは所謂決闘 Duell であつて、劍や短銃などで生命を賭して行ふものである。メンズールはドイツの學生が劍を以て行ふので、顔や頭に負傷することはあるが、通例生命に別條はない。しかし小膽卑怯の者には出来る事ではなく、竹刀を以てする撃劍とは、相互が一層眞面目になり、如字的に眞劍になるので、その鍛鍊的效果も大である。又これを行ふ者の個性が最もよく分るもの

で、ビスマルクはメンズールに於ても、既にビスマルクであつたのである。

然らばメンズールの實際はどんなものか。自分がエーナ大學在學中、或る組合の學生の案内で、實地見たところは、次のやうであつた。

或年の二月の下旬に、エーナ市の郊外のウエルニッツといふ村の酒屋の一室で、午前に六回の手合せがあつた。メンズールの對手は Pankant(劍闘者) といつて、或間隔を置いて直立し、その位置から一步も前後することは出来ず、左手は背後に廻はし、右手を高く上げて、頭の上で劍を振ふので、打ち下ろすことはない。劍 Schläger は凡一メートル位の長さで、細身で尖の所數寸が切れるやうになつてゐる。鏢のところは拳が隠れるほどに圓くかぶさつたやうに出来てゐる。闘士は首には厚く布を捲いて、動脈を保護し、眼と、眼から耳の間を眼鏡様のものを懸けて保護